

ふるさと

島崎藤村

青空文庫

はしがき

とうとう父さんが遠い外国の方から歸つた時、太郎や次郎への土産ばなし話にと思ひまして、いろいろな旅のお話をまとめたのが、父さんの『幼きものに』でした。あの時、太郎はやうやく十三歳、次郎は十一歳でした。

早いものです。あの本を作つた時から、もう三年の月日がたちます。太郎は十六歳、次郎は十四歳にもなります。父さんの家には、今、太郎に、次郎に、末子の三人が居ます。末子は母さんが亡くなると間もなく常陸の方の乳母の家に預けられて、七年もそ

の乳母うばのところところに居ゐましたが、今いまでは父とうさんの家うちの方ほうへ歸かへつて來きて居ゐます。三さぶらう郎らうはもう長ながいこと信しん州しゅう木き曾そのを小こ父ちちさんの家うちに養やしなはれて居ゐまして、兄あにの太た郎らうや次じ郎らうのところへ時とき々々、お手紙てがみなぞをよこすやうになりました。三さぶらう郎らうはことし十三さい歳さい、末すゑ子こがもう十一さい歳さいにもなりますよ。

父とうさんの家うちではよく三さぶらう郎らうの噂うはさをします。三さぶらう郎らうが居ゐる木き曾その方ほうの話はなしもよく出でます。あの木き曾その山やまの中なかが父とうさんの生うまれたところところななんですから。

人ひとはいくつに成なつても子こ供どもの時じ分ぶんに食たべた物ものの味あぢを忘わすれないやうに、自じ分ぶんの生うまれた土と地ちのことを忘わすれないものでね。假た令とへその土と地ちが、どんな山やまの中なかでありましても、そこで今こんど度ど、父とうさんは自じ分ぶんの

幼少ちひさい時じぶん分ぶんのことや、その子こども供どもの時じぶん分ぶんに遊あそび廻まはつた山やまや林はやしのお話はなし
を一さつ冊ちひのほん小つくさな本ほんに作つくらうと思おもひ立たちました。あの『幼をさなきものに』
と同おなじやうに、今こんど度どの本ほんも太たらう郎らうや次じらう郎らうなどに話はなし聞きかせるつもり
で書かきました。それがこの『ふるさと』です。

一 雀のおやど

みんなお出^{いで}。お話し^{はなし}ませう。先^まづ雀^{すずめ}のおやどから始^{はじ}めませう。

雀^{すずめ}、雀^{すずめ}、おやどはどこだ。

雀^{すずめ}のお家^{うち}は林^{はやし}の奥^{おく}の竹^{たけ}やぶにありました。この雀^{すずめ}には父^{とう}さまも母^{かあ}さまもありました。楽^{たの}しいお家^{うち}の前^{まへ}は竹^{たけ}ばかりで、青^{あを}いまつすぐな竹^{たけ}が澤^{たくさん}山^{なら}に竝^はんで生^あえて居^ゐました。雀^{すずめ}は毎^{まい}日^{にち}のやうに竹^{たけ}やぶに出^でて遊^{あそ}びましたが、その竹^{たけ}の間^{あひだ}から見^みると、楽^{たの}しいお家^{うち}がよけいに楽^{たの}しく見^みえました。

そのうちに、雀^{すずめ}の好^すきなお家^{うち}の前^{まへ}には竹^{たけ}の子^こが生^はえて來^きました。

母さまのお洗濯する方へ行つて見ますと、そこにも竹の子が出て来てゐました。

『あそこにも竹の子。ここにも竹の子。』

と雀はチュウチュウ鳴きながら、竹の子のまはりを悦んで踊つて歩きました。

僅か一晩ばかりのうちに竹の子はずんずん大きくなりました。雀が寝て起きて、また竹やぶへ遊びに行きますと、きのふまで見えなかつたところに新しい竹の子が出て來たのがあります。きのふまで小さな竹の子だと思つたのが、僅か一晩ばかりで、びつくりするほど大きくなつたのがあります。

雀はおどろいて、母さまのところへ飛んで行きました。母さまに

その話を^{はなし}して、どうしてあの小さな竹の子^{ちひ たけ こ}があんなに急に大きくなつたのでせうと尋ね^{たづ}ました。すると母さまは可愛^{かあ}い雀^{すずめ}を抱^だきまして、

『お前は初^{まへ}めて知^しつたのかい、それが皆^{みな}さんのよく言^いふ「いのち」（生命）といふものですよ。お前^{まへ}たちが大^{おほ}きくなるのもみんなその力^{ちから}なんですよ。』

と話^{はなし}してきかせました。

二 五木^{ごぼく}の林^{はやし}

太郎^{たらう}よ、次郎^{じらう}よ、お前^{まへ}達^{たち}は父^{とう}さんの生^{うま}れた山^{やま}地^ちの方^{ほう}のお話^{はなし}を聞

きたいと思ひますか。

ひのき、さはら、あすひ、まき、ねず
 檜木、榎、明檜、榎、
 —それを木曾の方では五木といひまし

て、さういふ木の生えた森や林があつた深い谷間に茂つて居るの

です。五木とは、五つの主な木を指して言ふのですが、まだその

他に栗の木、杉の木、松の木、桂の木、檜の木などが生えて居ま

す。樅の木、榎の木も生えて居ます。それから栃の木も生えて居

ます。太郎や次郎は一度父さんに随いて、三郎の居る木曾の小

父さんの家を訪ねたことが有りましたらう。あの小父さんの家の

前から、木曾川の流れるところを見て來ましたらう。小父さんの

家のある木曾福島町は御嶽山に近いところですが、あれから

木曾川について十里ばかりも川下に神坂村といふ村がありま

す。それが父さんとうの生れた村むらです。

三 山やまの中へ来るお正月しやうぐわつ

父さんとうも昔むかしはお前達まへたちと同じやうに、お正月しやうぐわつの来るのを樂たのしみにした子供こどもでしたよ。

お正月しやうぐわつが来る時分じぶんになると、父さんとうの生れたお家うちでは自分じぶんのところでお餅もちをつきました。そのお餅もちは爐邊ろばたにつぐいた庭にはでつきましたから、そこへ爺ぢいやが小屋こやから杵きねをかついで來きました。臼うすもころがして來きました。お餅もちにするお米こめは裏口うらぐちの竈かまどで蒸むしましたから、そこへも手傳てつだひのお婆ばあさんが來きて樂たのしい火ひを焚たきました。

やがて蒸籠せいろうといふものに入れて蒸むしたお米こめがやはらかくなります
 とお婆ばあさんがそれを臼うすの中なかへうつします。爺ぢいやは杵きねでもつて、そ
 れをつき始はじめます。だんだんお米こめがねばつて来て、お餅もちが臼うすの中なか
 から生うまれて来きます。爺ぢいやは力ちから一いちぱい杵きねを振り上あげて、それを打うち
 おろす度たびに、臼うすの中なかのお餅もちには大おほきな穴あながあきました。お婆ばあさん
 はまた腰こしを振ふりながら、爺ぢいやが杵きねを振り上あげた時ときを見計みはかつては穴あな
 のあいたお餅もちをこねました。

『べつたらこ。べつたらこ。』

その餅もちつきの音おとを聞きくと、父とうさんは子こ供ども心ごころにもお正しやう月ぐわつが
 山やまの中なかのお家うちへ来くることを知しりました。

四 子供の時分

これから父さんはお前達に、自分の子供の時分のことをお話し
 ようと思ひます。

父さんの幼少な時分には、今のやうに少年の雑誌といふものも
 ありませんでした。お前達のやうに面白いお伽噺の本や、
 可愛らしい繪のついた雑誌などを讀むことも出来ませんでした。
 讀んで見たくも、なんにもさういふお伽噺の本や雑誌が無い
 んでせう、おまけに、父さんの生れたところは山の中の田舎でせ
 う、そのかはり、幼少な時分の父さんには、見るもの聞くものが
 みんなお伽噺でした。

五 荷物(にもつ)を運ぶ(はこ)馬(うま)

『もしく、お前(まへ)さんは今(いま)歸(かへ)るところですか。』
 父(とう)さんがお家(うち)の門(もん)の外(そと)に出(で)て見(み)ますと馬(うま)が近(きん)所(じよ)の馬(うま)方(かた)に引(ひ)か
 れて父(とう)さんの見(み)て居(ゐ)る前(まへ)を通(とほ)ります。この馬(うま)は夕(ゆふ)方(がた)になると、
 きつと歸(かへ)つて來(く)るのです。

『さうです。今日(けふ)は荷物(にもつ)をつけて隣(となり)の村(むら)まで行(い)つて來(き)ました。』
 とその馬(うま)が父(とう)さんに言(い)ひました。

『お前(まへ)さんの首(くび)には好(おと)い音(ね)のする鈴(すず)がついて居(ゐ)ますね。』
 と父(とう)さんが言(い)ひますと、馬(うま)は首(くび)をふりながら、

『えゝ。わたしあるたび
 私が歩く度にこの鈴が鳴ります。私はこの鈴の音を聞き
 ながら、うちの方へ歸つてまゐります。馬も荷物をつけて行く時はな
 かく骨が折れますが、一日の仕事をすまして山道を歸つて來
 るのは樂みなものですよ。』

さう馬が言つて、さも自慢さうに首について居る鈴を鳴らして見
 せました。父さんのお家の前は木曾街道と言つて、鐵道も汽車
 もない時分にはみんなその道を歩いて通りました。高い山の上で
 おまけに坂道の多い所ですから荷物はこの通り馬が運びました。
 どうかすると五匹も六匹も荷物をつけた馬が續いて父さんのお家
 の前を通ることもありました。男や女の旅人を乗せた馬が馬
 方に引かれて通ることもありました。父さんの聲を掛けたのは、

近所に飼はれて居る馬で、毎日々々隣村の方へ荷物を運ぶのがこの馬の役目でした。

馬が自分のお家へ歸つた時分に父さんはよく馳け出して行つて見ました。

『御苦勞。御苦勞。』

と馬方は馬を褒めまして、馬の脊中にある鞍をはづしてやつたり馬の顔を撫で、やつたりしました。それから馬方は大きな盥を持つて來まして、馬に行水をつかはせました。

『どうよ。どうよ。』

と馬方が言ひますと、馬は片足づゝ盥の中へ入れます。馬の行水は藁でもつて、びつしより汗になつた身體を流してやる

のです。父さんは馬方の家の前に立つて、樂さうに行水をつかつて貰つて居る馬を眺めました。そして、馬の行水の始まる時分には山の中の村へ夕方の方の來ることを知りました。それに氣がついては、父さんは自分のお家の方へ歸りませうと思ひました。

六 奥山に燃える火

父さんの田舎では、夕方になると夜鷹といふ鳥が空を飛びました。その夜鷹の出る時分には、蝙蝠までが一緒に舞ひ出しました。

『蝙蝠——來い、來い。』

と言ひながら、父さんは蝙蝠と一緒になつて飛び歩いたものです。どうかすると狐火といふものが燃えるのも、村の夕方でした。

『御覽狐火が燃えて居ますよ。』

と村の人に言はれて、父さんはお家の前からそのチラ／＼と燃える青い狐火を遠い山の向ふの方に望んだこともありました。あれは狐が松明を振るのだとも言ひましたし、奥山の木の根が腐つて光るのを狐が口にくはへて振るのだとも言ひました。父さんは子供で、なんにも知りませんでした。あの青い美しい不思議な狐火を夢のやうに思ひました。父さんの生れたところは、

それほど深い山の中でした。

七 水の話

とうとう父さんの田舎は木曾街道の中の馬籠峠といふところで、信濃の國の一番西の端にあたって居ました。お正月のお飾りを片付ける時分には、村中の門松や注連縄などを村のはづれへ持つて行つて、一緒にして焼きました。村の人はめい／＼お餅を竿の先にさしてその火で焼いて食べたり、子供のお清書を煙の中に投げこんで、高く空にあがつて行く紙の片を眺めたりしました。火の氣と、煙とで、お清書が高くあがれば、それを書いたもの

の手てがあがると言いひました。松まつの燃もえる煙けむりと一しよ緒せになつてお清せい
 書よがたか高く、高たかくあがつて行ゆくのは丁ちやう度ど風たこでもあげるのを見みる
 やうでした。その正しやう月ぐわつのお飾かざりを集あつめて焼やく村むらのはづれまで行ゆ
 きますと、その邊へんにはびつくりするほど大おほきな岩いはや石いしが田圃たんぼあひだの間
 に見みえました。そこからはもう信濃しなのと美濃みのの國くに境さかひに近ちかいので
 す。父とうさんの田舎ゐなかは信濃しなのの山國やまぐにから平たひらな野原のほらの多おほい美濃みのの方ほうへ
 降おりて行ゆく峠たうげの一番上ばんごへのところにあつたのです。
 さういふ岩いはや石いしの多おほい峠たうげの上うへに出來できたお城しろのやうな村むらですから、
 まるで梯子段はしごだんの上うへにお家うちがあるやうに、石垣いしがきをきづいては一
 軒けんづゝお家うちが建たてゝありました。どちらを向むいても坂さかばかりでし
 た。父とうさんがお隣となりの酒屋さかやの方ほうへ上のぼつて行ゆくにも坂さか、お忠婆ちうばあさんと

いふ人の住む家の方へ降りて行くにも坂でした。

この田舎は水に不自由なところでした。谷の底の方まで行けば山

の間を流れて来る谷川がなくもありませんが、人家の近くには

それもありませんでした。そこで峠の方から清水を引いて、それ

を溜める場所が造つてあつたのです。何といふ好い清水が長い樋

を通つて、どん／＼流れて來ましたらう。父さんが輪でも廻しな

がら遊びに行つて見ますと、流れて來た水が大きな箱の中に澄ん

で溜まつて居ます。その水が箱から溢れて村の下の方へ流れて行

きます。天秤棒で兩方の肩に手桶をかついだ近所の女

達がそこへ水汲に集まつて來ます。水の不自由なところに生

れた父さんは特別にその清水のあるところを樂く思ひました。

みんなが威勢よく水を汲んだり擔いだりするのを見るのも楽しく思
 ひました。そればかりではありません。父さんが子供の時分から
 水といふものを大切に思ひ、ずっと大きくなつても水の流れて
 居るのを見るのが好きで、水の音を聞くのも好きなのは、斯うし
 て水に不自由な田舎に生れたからだと思ひます。
 父さんのお家には井戸が掘つてありました。その井戸は柄杓で
 水の汲めるやうな浅い井戸ではありません。釣いても、釣いても、
 なかく釣瓶の上つて來ないやうな、深い井戸でした。
 父さんの祖母さんの隠居所になつて居た二階と土藏の間を通り
 ぬけて、裏の木小屋の方へ降て行く石段の横に、その井戸があ
 りました。そこも父さんの好きなところで、家の人が手桶をかつ

いで來たり、水を汲んだりする側に立つて、それを見る《み》の
 たのしおもを楽しく思ひました。父さんの幼少な時分にはお家にお雛といふ女
 が奉公して居まして、半分乳母のやうに父さんを負つたり抱
 いたりして呉れたことを覚えて居ます。そのお雛は井戸から石
 段を上り、土藏の横を通り、桑 畠の間を通つて、お家の臺
 どころまでづゝ水を運びました。

八 風

やまなかあななか山の中の田舎では、近所に玩具を賣る店もあります。村の
 こどもたこ子供は風なでも自分で造りました。

父とうさんはまだ幼ちひさ少かかつたものですから、お家うちの爺ぢいやに手傳てつだつて貰もら
 ひまして、造作ぎょうさなく出來できる風たこを造つくりました。紙かみと絲いととはお祖母ばあさ
 んが下くださる、骨ほねの竹たけは裏うらの竹たけ藪やぶから爺ぢいやが切きつて來きて呉くれる、
 何なにもかもお家うちにある物もので間まに合あひました。爺ぢいやが青あをい竹たけを細ほそく削けづ
 つて呉くれますと、それそれに父とうさんが御飯粒ごはんつぶで紙かみを張はりつけまして、
 鯛すめのかたちたこの風つくを造つくりました。みんなのするやうに、風たこの尾をには
 矢張紙やはらかみを長ながく切きつてさげました。
 末子すゑこは學がく校かうの先せん生せいから手しゆ工こうを習ならひませう、自分じぶんで紙かみの箱はこな
 どを造つくるのは、上じやう手ずに出來できても出來できなくても、樂たのみなものでせ
 う。父とうさんが自分じぶんで風たこを造つくつたのは、丁度ちやうどお前達まへたちの手しゆ工こうの
 樂たのみでしたよ。細ほそい竹たけや紙かみでこしらへたものが、だんく風たこの

《たこ》のかたちになつて行つた時は、どんなに父さんも嬉しかつたでせう。父さんはその風たこに糸目いとめをつけまして、田圃たんぼの方ほうへ持つて行ゆきました。

『風かぜよ、來こい、來こい、風揚たこあがれ。』

と言いつて、近所きんじよの子供こどもも手造てづくりにした風たこを揚あげに來きて居ゐます。田圃たんぼ側わきの枯かれた草くさの中なかには、木瓜ぼけの木きなぞが顔かほを出だして居ゐまして、遊あそび廻まはるには樂たのしい場所ばしよでした。

『あゝ好よい風かぜが來きました。この風かぜに早はやく揚あげて下ください。』
と風たこが言いひました。父とうさんが大急おほいそぎで糸いとを出だしますと、風たこは左さ右みぎに首くびを振ふつたり、長ながい紙かみの尾ををヒラ／＼させたりしながら、さも心こゝろ持もちよささうに揚あがつて行ゆきました。

凧たこは空そらの方ほうに居ゐて、父とうさんにいろくな注ちうもん文もんをします。『あゝ
 わたしは面めんくら喰くらひそうになりました。もつと糸いとをたぐつて下ください
 。

『と言いふときには、父とうさんは凧たこの注ちうもん文もんする通とほりに糸いとをたぐつて
 やります。『今こんど度ひだりは左ほうの方かへ傾かしぎさうになりました。早はやく右みぎの方ほう
 へ糸いとを引ひいて下ください。』と言いふときには、父とうさんはまた凧たこの言いふ通とほ
 りに右みぎの方ほうへ糸いとを引ひいてやります。そのうちに凧たこは風かせをうけて、
 高たかく高たかく、のして行ゆきました。

『凧たこさん、よく揚あがりましたね。そんなに高たかいところへ揚あがつたらそ
 こいらがよく見みえませう。』

と父とうさんが下したから尋たづねますと、凧たこは高たかいそらから見みえる谷たに底そこの話
 をしました。

『たご 凧さん、なに 何が見えます。ほうぼう ほうぼうのお家が見えますか。』

『え、いし 石の載せてあるお家うちの屋根から、たけやぶ 竹藪まで見えます。

うまかご 馬籠の村むらが一目めに見えます。あらまち 荒町の鎮守ちんじゆの杜もりまで見えます。

。』

『お祖父ぢいさんの好きすな惠那山ゑなやまは奈何どんなでせう。』

『惠那山ゑなやまもよく見みえます。もつと向むかふの山やまも見みえます。高たかい山やまが

いくつもく見みえます。その山やまの向むかふには、見渡みわたすかぎりひろく廣

々とした野原のほらがありますよ。何なにか光ひかつて見みえる河かはのやうなもの

もありますよ。』

『それはきつとお隣となりの國くにです。』

とう 父さんの生うまれた田舎あなは美濃みのの方ほうへ降おりようとする峠たうげの上うへにありま

したから、お家のお座敷からでもお隣の國が山の向ふの方に見えました。極くお天氣の好い日には、遠い近江の國の伊吹山まで、かすかに見えることがあると、祖父さんが父さんに話して呉れたこともありました。

『お蔭で、高いところから見物しました。』

と凧が言ひました。父さんも凧を揚たり、凧の話を聞いたりして、面白く遊びました。自分の造つた凧がそんなによく揚つたのを見るのも楽しみでした。

『凧も見物で草臥れました。もうそろそろ降して下さい。』
と凧が言ふものですから、父さんが糸をたぐりますと、凧はフハ

くフハく空そらを舞まふやうにして、田圃たんぼのところまで嬉うれしさうに降おりて來きました。

九 猿羽織さるばおり

猿羽織さるばおりと言いつて、父とうさんの田舎ゐなかの子供こどもは、お猿さんさるの着きる袖そでの無ない羽織はおりのやうなものを着きました。寒さむくなるとそれそれを着きました。その猿羽織さるばおりを着きて雪ゆきの中なかを飛とんで歩あるくのは、丁度ちやうど木曾きその山やまの中なかのお猿さんさるが、雪ゆきの中なかを飛とんで歩あるくやうなものでした。

十 雪ゆきは踊をどりつゝある

とう
 父さんの田舎では、何處の家でも板で屋根を葺いて、風や雪をふ
 せぐために大きな石が並べて屋根の上に載せてありました。なん
 と、あの石を載せた板屋根は山の中の住居らしいでせう。山には
 おほひのきはやし
 大きな檜木の林もありますから、その厚い檜木の皮を板のかはり
 にして、小屋の屋根などを葺くこともありました。雪が來ればさ
 ういふお家の屋根も埋まつてしまひ、畠も白くなり、竹藪も寢た
 やうになつてしまひます。

げんきすずめ
 元気な雀は、そんな歌に頓着なしで、自分のお宿も忘れへわ
 すゝれたやうに雪と一緒に踊つて歩きます。

さかみちおほとうむら
 坂路の多い父さんの村では、氷滑りの出来る場所が行く先

にありました。村の子供はみな鳶とびぐち口くちを持つて凍こげつた坂路さかみちを滑すべ
 りました。この氷こほりすべ滑ゆきりが雪ゆきの日の樂たのしみの一つで、父とうさんも爺ぢい
 やに造つくつて貰もらつた鳶とびぐち口くちを持もちだ出しては近きんじよ所じよの子供こどもと一しよ緒ゆきに雪ゆきの
 降ふる中なかで遊あそびました。積つもつた雪ゆきを凍こげつた土つちの上うへに集あつめて、それを
 下駄げたの齒はでこするうちには、白しろい夕ゆふ、キのやうな路みちが出來上できあがりま
 す。鳶とびぐち口くちを手てにしながら坂さかの上うへの方ほうから滑すべりますと、ツイーノ
 くと面おもしろ白しろいやうに身からだ體たいが行ゆきました。もしか滑すべり損そこねて鳶とびぐち口くち
 で身からだ體たいを支さへ損そこねた場ばあひ合あひには雪ゆきの中なかへ轉ころげこみます。さういふ度たび
 に子こども供ども同どう志しの揚あげる笑わらひ聲こゑを聞きくのも樂たのしみでした。自じぶん分ぶんの着きもの物ものに
 ついた雪ゆきをはらつて復またすべ滑ゆりに行くたのしのも樂たのしみでした。どうかすると
 凍こげつて鏡かゞみのやうに光ひかつて來きます。その上うへに白しろく雪ゆきでも降ふりかゝると

こほりすべ 氷 滑りの場所ばしよとも分わからないことがあります。村むらの人達ひとたちが通とほ

りかゝつて、知らしずに滑すべつて轉ころぶことなぞもありました。

父とうさんはお前まへ達たちのやうに、竹馬たけうまに乗のつて遊あそび廻まはることも好すき

でした。雪ゆきの日ひには殊ことにそれが樂たのしみでした。大黒屋だいこくやの鐵てつさん、

問屋とひやの三郎らうさんなどゝといふ近所きんじよの子供こどもが、竹馬たけうまで一しよ緒ばにな

るお友とも達たちでした。そんな日ひでも、馬うまが荷物にもつをつけ、合羽かつばを着きた

村むらの馬方うまかたに引ひかれて雪ゆきの路みちを通とほることもありました。父とうさんが

竹馬たけうまの上うへから

『今日こんにちは。』

と言いひますと、お馴染なじみの馬うまは鼻はなから白しろい氣息いきを出だして笑わらひながら

『やあ、今日こんにちは、お前まへさんも竹馬たけうまですね。』

と挨拶あいさつしました。美濃みのの中津川なかつがはといふ町まちの方ほうから、いろ／＼な物ものを脊中せなかにつけて來きて呉くれるのも、あの馬うまでした。時ときには父おとうさんの村むらなぞに無ないめづらしい玩具おもちゃや、父とうさんの好すきな箱はこ入いりの羊羹やうかんと方ほうなりの國くにの方ほうから土産みやげにつけて來きて呉くれるのも、あの馬うまでした。

『雪ゆきが降ふつて樂たのしみでせうね。』
 と馬うまが言いひましたが、雪ゆきが降ふれば馬うまでも嬉うれしいかと父とうさんは思おもひました。山やまの中なかへ來くる冬ふゆやお正しやうぐわつ月つきには、お前まへ達たちの知しらないやうな樂たのしさもありますね。氷こほりすべ滑なりや竹馬たけうまで凍こごへた手てをお家うちの爐邊ろばたの火ひにあぶるのも樂たのしみでした。

一一 庄吉爺しやうきちぢいさん

お前まへ達は荒くわうじん神かみさまを知しつて居ゐませう。ほら、臺だいどころ所の竈かまど
 の上うへに祭まつる神かみさまのこゝろを荒くわうじん神かみさまと言いひませう。あゝして
 火ひを鎮しづめる神かみさまばかりでなく、父とうさんの田舎ゐなかでは種いろく々なもの
 を祭まつりました。

繭まゆだま玉たまのかたちを、しんこで造つくつてそれを竹たけの枝えだにさげて、お飼か
 蠶いこさまを守まもつて下くださる神かみさまをも祭まつりました。病びやうき氣きで倒たふれた馬うま
 のためには、馬ば頭とうくわんおん觀かん音おんを祭まつりました。歩あるいて通とほる旅たび人びとの無ぶ
 事じを祈いのるためには、道祖神だうそじんを祭まつりました。

父とうさんは爺ぢいやに連つれられて、山やまの神かみさまへお餅もちをあげに行いつた事こと

おほおほ
 を覚えて居ます。湯舟澤といふ方へ寄つた山のはづれに、山の
 かみ
 神さまが祭つてありました。その小さな祠の前に、米の粉で造つ
 たお餅もちをあげて來ました。その邊は、どつちを向いても深い山ば
 かりで、爺ぢいやにでも隨ついて行かなければ、とても幼少ちひさな時分じぶんの父
 さんが獨ひとりで行ゆかれるところではありませんでした。

やまはやしとう
 山や林は父さんの故郷ふるさとです。父さんのやうに大きくなつても、
 わす
 忘れずに居ゐるのは、その故郷ふるさとです。父とうさんは爺ぢいやに連つれられて
 ふかはやしはう
 深い林の方へも行いつて見みました。そこへ行くと爺ぢいやの伐きつた木きが
 ありました。松葉まつばの積つんだのもありました。爺ぢいやはその木きを背負しよ
 つたり、松葉まつばを背負しよつたりして、お家うちの木小屋きごやの方ほうへ歸かへつて來く
 のでした。

この爺ぢいやは庄しょう吉きちといふ名なで、父とうさんの生うれなまい前まへからお家うちに奉ほう公こうして居ゐました。

『よ、どつこいしょ。』

と爺ぢいやは山やまからかついで來きた木きをおろしました。木き小屋ごやのなかでそれを割わりました。この爺ぢいやの大おほきな手ては寒さむくなると、鞆あかぎれが切きれて、まるで膏かう藥やくだらけのザラ／＼とした手てをして居ゐりましたが、でもその心こころは正しやう直ちきな、そして優やさしい老らう人じんでした。

爺ぢいやは山やまから伐きつて來きた木きを木き小屋ごやにしまつて置おいて、焚たきつけにする松まつ葉ばもしまつて置おいて、要いるだけづゝお家うちの爐ろ邊ばたへ運はこびました。赤あかくとした火ひが毎まい日にち爐ろ邊ばたで燃もえました。曾ひい祖ばあ母あさん、祖お父ちさん、祖お母ぼさん、伯お父ちさん、伯お母ぼさんの顔かほから、奉ほう公こうするお

ひな^{ひな}の顔^{かほ}まで、家^{うちぢうち}中のものゝ顔^{かほ}は焚^{たき}火^びに赤^{あか}く映^{うつ}りました。その樂^{たのし}
 い爐^ろ邊^{ばた}には、長^{なが}い竹^{たけ}の筒^{つゝ}とお魚^{さかな}の形^{かた}と繩^{なは}とで出^{でき}來^きた煤^{すす}けた自^じ在^{ざい}
 鍵^ぎが釣^つるしてありまして、大^{おほ}きなお鍋^{なべ}で物^{もの}を煮^にる場^{ばしよ}所^{しょ}でもあり
 家^{うちぢうちあつ}中^{ちゆう}集^{あつ}まつて御^ご飯^{はん}を食^たべる場^{ばしよ}所^{しょ}でもありました。父^{とう}さん^の田^{あな}舎^な
 では寒^{さむ}くなると毎^{まい}朝^{あさ}芋^{いも}焼^や餅^{もち}といふものを焼^やいて、朝^{あさ}だけ御^ご飯^{はん}
 のか^たはりに食^たべました。蕎^{そば}麥^この粉^{こな}に里^{さと}芋^{いも}の子^こをま^つけて造^{つく}つたそ
 の焼^や餅^{もち}の焦^こげたと^こころへ大^{だい}根^{こん}お^ろしをつ^けて焚^{たき}火^びにあ^{たり}な
 がらホク^くく食^たべるのは、ど^んな^なにおい^いし^いでせう。そ^の蕎^{そば}麥^この
 香^{かほ}ひの^よする焼^やきた^たての^{もち}お餅^{もち}の^{なか}中^{ちゆう}から大^{おほ}きな^{さと}里^{さと}芋^{いも}の^こ子^こな^ぞが白^{しろ}く
 出^でて來^きた時^{とき}は、ど^んな^なに嬉^{うれ}しいでせう。爺^{ぢい}や^は御^ご飯^{はん}の時^{とき}でも、な
 んでも、草^{わら}鞋^ぢば^きの土^ど足^{そく}のま^まで爐^ろの片^{かた}隅^{すみ}に足^{あし}を投^なげ入^いれまし

たが、夕方仕事ゆふがたしごとの濟む頃す ころから草鞋わらぢをぬぎました。爐邊ろばたにある古ふるい屏風べうぶの側わきが爺ぢいやの夜よなべをする場所ばしょときまつて居ゐました。爺ぢいやはその屏風べうぶの側わきに新あたらしい藁わらなぞを置おいて、父とうさんのために小ちひさな草履ざうりをつく、自分じぶんではく草鞋わらぢをつく。爺ぢいやのお伽話とぎばなしはその時ときに始はじまるのでした。

父とうさんはこの好すきな老らうじん人ひとから、畠はたけよりあらはれた狸たぬきや猪むじなの話はなし、
 山やまで飛とび出だした雉きじの話はなし、それから奥おく山やまの方ほうに住すむといふ恐おそろし
 い狼おほかみや山やま犬いぬの話はなしなぞを聞ききましたが、そのうちねむに眠ねむくなつて、
 爺ぢいやの話はなしを聞きながら爐邊ろばたでよく寝ねてしまひました。

とう
父さんの幼少な時分には、お錢といふものを持たせられませんでしたから、それが癖になつて、お錢は子供の持つものでないと思つて居ましたし、巾着からお錢を出して自分の好きなものを買ふことも知りませんでした。お家からお錢を貰つて行つて何か買ふのは、村の祭禮の時ぐらゐのものでした。

そのかはり、お庭にある柿や梨なぞが生りたての新しい果物を父さんに御馳走して呉れました。祖母さんが朴の木の葉で包んでくださるゝ握飯の香でも嗅いだ方が、お錢を出して買ったお菓子より餘程おいしく思ひました。お家の外を歩き廻つても、石垣のところには黄色い木苺の實が生つて居るし、竹藪のか

げの^{たか}高い^{えのき}榎木^{した}の下^{かん}には、^{ちひ}香ばしい^み小さな^お實^あが^あ落ちて^あ居^{むら}ました。村

のは^{なし}づれ^きには「^{なし}けんほ梨^き」とい^きふ木^きもあ^きつて、^{たか}高い^{えだ}枝^{うへ}の^{さんご}上^ごに^ご珊瑚^ご

瑚^{じゆ}珠^ごの^なやうな^な實^なが生^{じぶん}る^{きそぢ}時^{とほ}分^{とほ}には^{たびびと}木^き曾^{とほ}路^{とほ}を^{とほ}通^{とほ}る^{とほ}旅^{とほ}人^{とほ}は^{とほ}め^{とほ}づ^{とほ}ら^{とほ}し

さうに^{あうむ}仰^{あうむ}向^{あうむ}いて^{あうむ}見^{あうむ}て^{あうむ}行^{あうむ}き^{あうむ}ま^{あうむ}し^{あうむ}た^{あうむ}が、^{あうむ}そ^{あうむ}の^{あうむ}實^{あうむ}も^{あうむ}取^{あうむ}れ^{あうむ}ば^{あうむ}食^{あうむ}べ^{あうむ}ら^{あうむ}れ^{あうむ}て^{あうむ}甘

い^{あぢ}味^{あぢ}が^{あぢ}し^{あぢ}ま^{あぢ}し^{あぢ}た^{あぢ}。^{あぢ}そ^{あぢ}れ^{あぢ}ば^{あぢ}か^{あぢ}り^{あぢ}で^{あぢ}は^{あぢ}あ^{あぢ}り^{あぢ}ま^{あぢ}せ^{あぢ}ん、^{あぢ}山^{あぢ}に^{あぢ}あ^{あぢ}る^{あぢ}木^{あぢ}の^{あぢ}葉^{あぢ}、

田^{たん}圃^ぼに^{くさ}あ^{くさ}る^な草^なの中^{なか}にも『^た食^たべ^たら^たれる^たから^たお^たあ^たが^たり。』^いと^い言^いつ^いて^いく

れ^いる^いの^いも^いあ^いり^いま^いし^いた^い。

「^あス^あイ^あ葉^あ」^いと^い言^いつ^いて、^あ青^あい^あ木^あの^あ葉^あの^あ生^あで^あ食^あべ^あら^あれる^あも^あの^あも^ああ^あり^あま

した。^{くさ}草^{くさ}で^{くさ}は「^{くさ}いた^{くさ}ど^{くさ}り」^{くさ}や「^{くさ}す^{くさ}い^{くさ}こ^{くさ}ぎ」^{くさ}が^{くさ}食^{くさ}べ^{くさ}ら^{くさ}れ^{くさ}ま^{くさ}し^{くさ}た^{くさ}が、

あ^くの「^くす^くい^くこ^くぎ」^くの^く莖^くを^く採^くつ^くて^く來^くて^くお^く家^くで^く鹽^く漬^くを^くし^くて^く遊^くぶ^くこ^く

も^ああ^あり^あま^あし^あた^あ。

『手をお出し。私もおいしいものを上げますよ。』

父さんが石垣の側を通る度に、蛇苺が左様言つては父さんを誘ひました。蛇苺は毒だと言ひます。それを父さんも聞いて知つて居ました。あの眼のさめるやうな紅い蛇苺の實が甘いことを言つてよく父さんを誘ひましたが、そればかりは觸りませんでした。

父さんの幼少い時分に抱いたり背負つたりして呉れたお雛は、斯ういふ山家に生れた女でした。筍の皮を三角に疊んで、中に紫蘇の葉の漬けたのを入れて、よくそれを父さんに呉れたのもお雛でした。それを吸へば紫蘇の味がして、チュー／＼吸ふうちに、だん／＼筍の皮が赤く染つて來るのも嬉しいものでした。このお雛

は村の髪結の娘でした。お雛のお父さんは數衛といふ名で、男の髪結でしたが、村中で一番汚いといふ評判の人でした。その汚い髪結の家のお雛に育てられると言つて、父さんは人からかは調戲されたものです。

『やあ數衛の子だ。』

こんなことを言つて惡戯好きな人達は父さんまで汚い髪結の子にしてしまひました。しかし、お雛は幼少い時分の父さんをよく見て呉れました。お雛の歌ふ子守唄は父さんの一番好きな唄でした。それを聞きながら、父さんはお雛の背中寝てしまふこともありました。

父さんが獨りでそこいらを遊び廻る時分にはお雛に連れられてよ

よもぎつ 蓬を摘みに行つたこともありす。あたゝかい日の映つた田圃の側で、よもぎつ 蓬を摘むのは楽しみでした。それをお家へ持つて歸つて來て、うす 白でつけばくさもち 草餅が出来ました。

一三 つばめ 燕の來る頃

つばめ 燕の來る頃でした。

たくさん つばめとう 澤山な燕が父さんの村へも飛んで來ました。一羽、二羽、三羽、

は 四羽——とても 勘 定することの出來ない何十羽といふ燕が村

へ着いたばかりの時には、直ぐに人家へ舞ひ降りようとはしませ

ん。はな 離れさうで離れない燕の群は、ほそなが 細長い形になつたり、まるい

輪わの形かたちになつたりして、村むらの空そらのたか高いところを揃そろつて舞まつて居ゐま
 す。そのうちはそらに一羽は空まから舞おひ降りたかと思おもふと、何なん十羽ぼといふ
 燕つばめが一時じに村むらへ降おりて來きます。そして互たがひに嬉うれしさうな聲こゑで鳴なき合あ
 つて、舊ふるい馴なじ染みの軒のき場ばを尋たづね顔がほに、思おもひくくに分わかれて飛とんで行ゆき
 ます。父とうさんのお家うちへ飛とんで行ゆくのもあれば、お隣となりの大だい黒こく屋やへ
 飛とんで行ゆくのもあれば、そのまた一軒けん置おいてお隣となりの八幡やはた屋やの方ほうへ
 飛とんで行ゆくのもあります。ずつと坂さかの下したの方ほうの三浦うらや屋やといふ宿屋やどや
 の方ほうへ飛とんで行ゆくのもあります。村むらで染そめ物ものをする峯屋みねやへも、俵た
 屋はらやのお婆ばあさんうちの家うちへも、和泉屋いづみやの和太郎わたらうさんうちのお家うちへも飛とんで
 行ゆきました。父とうさんが村役場むらやくばの前まへを通とほりますと、そこへ來きて羽はね
 を休やすめて居ゐる燕つばめもありました。燕つばめは役場やくばの前まへに建たて、ある木きの標は

柱しらながを眺ながめて、さもく遠とほい旅行りよかうをして來きたやうな顔かほをして居ゐました。

『長野縣ながのけん西筑摩郡にしちくまごほりきそみさかむら木曾神坂村』とその木きの標柱はしらには書かいてあるのです。父とうさんは燕つばめの話はなしを聞きいて見みたいと思おもひまして、いろくはなに話はなしかけましたが、まるでこの燕つばめは異人あじんでした。一向かうに言こ葉とばが通つうじませんでした。

『もしもし、燕つばめさん、お前まへさんは一年ねんに一度どづゝ、この村むらへ來くではありませんか。遠とほくくに國ほうの方ほうへ行いつて居ゐて、日本にほんの言葉ことばも忘れわすれたのですか。』と父とうさんが言いひますと、燕つばめは懐なつかしい國くにの言葉ことばで物ものを言いひたくても、それが言いへないといふ風ふうで、唯ただ、ペチャ、クチャ、ペチャ、クチャ、異人あじんさんのやうな解わからないことを言いひま

した。

つばめうれ
燕は嬉しさに父さんを見て尻尾の羽を左右に振ながら、遠い空
から漸くこの山の中へ着いたといふ話でもするらしいのでした。
それを國の言葉で言へば、『皆さん、お變りもありませんか、あ
なたのお家の祖父さんもお健者ですか。』と尋ねるらしいので
したが燕の言ふことは早口で、

『ペチャヤ、クチャヤ、ペチャヤ、クチャヤ。』

としか父さんには聞えませんでした。

斯うした言葉の通じない燕も、村に住み慣れて、家々の軒に巣
をつくり、くちばしの黄色い可愛い子供を育てる時分には、大分
言葉がわかるやうになりました。燕が父さんのところへ来て何を

言ふかと思ひましたら、こんなことを言ひ《い》ました。

『私共は遠い國の方から参るものですから、なか／＼言葉が

覺えられません、でも、あなたがたが親切にして下さるのを、

何より有難く思ひます。鶉といふ鳥や鶉といふ鳥は、何百羽飛

んで参りましても、みんな網や籬に掛つてしまひますが、私

共にかぎつて軒先を貸して下さつたり巢をかけさせたりして

下さいます。それが嬉しさに、斯うして毎年旅をして参るので

す。』

一四 永昌寺

『今日は。』

と狐が永昌寺の庭へ来て言ひました。永昌寺とは、父さんの村のお寺です。そのお寺に、桃林和尚といふ年とつた和尚さんが住んで居ました。この僧侶は心の善い人でした。

『お前は何しに來ました。』

と桃林和尚が尋ねますと、狐の言ふことには、

『わたしはお寺を拜見にあげりました。』

父さんが初めてあがつた小學校も、この和尚さんの住むお寺の近くにありました。小學校の生徒に狐がついたと言つて、一度大騒ぎをしたことがありました。父さんはその時分はまだ幼少くてなんにも知りませんでした。その狐のついたといふ生徒

は口から泡を出し、顔色も蒼ざめ、ぶる／＼震へてしまひました。何度もくも名前を呼ばれて、漸くその生徒は正氣に復つた事がありました。桃林和尚はその話も聞いて知つて居りましたから、いづれ狐がまた何か悪戯をするためにお寺へ訪ねて來たに違ひないと、直に感づきました。

『和尚さん、和尚さん、こちらは大層好いお住居ですね。

この村に澤山お家がありまして、こちらにかなふところはありません。村中第一の建物です。こんなお住居に被入しやるをしやう和尚さんは仕合せな方ですね。』

斯う狐は言ひました。狐は調戲ふつもりでわざと桃林和尚の機嫌を取るやうにしましたが、賢い和尚さんはなかくその手

に乗りませんでした。

『ハイ、御覽の通り、村では大きな建物です。しかしこのお寺は村中の人達の爲めにあるのです。私はこゝに御奉公して居るのです。お前さんは私がこの住居の御主人のやうなことを言ひますが私は唯こゝの番人です。』

斯う桃林和尚が答へましたので、狐は頭を搔きく裏の林の方へこそく隠れて行きました。

桃林和尚が御奉公して居た永昌寺は、小高い山の上にあります。そのお寺の高い屋根は村中の家の一番高いところでした。狐が来て言つた通り、村中一番の建築物でもありません。そこで撞く鐘の音は谷から谷へ響けて、何處の家へも傳はつ

て行きまゆした。その鐘かねの音おとは、年としとつた和尚をしやうさんの前まへの代だいにも撞つき、そのまた前まへの代だいにも撞ついて來たのきです。もう何なん百年ねんといふことななく、古ふるい鐘かねの音おとが山やまの中なかで鳴なつて居たのありです。

永昌寺えいしやうじのある山やまの中ちゆうと途とには、村むらぢゆう中ちゆうのお墓はかがありました。こんもりと茂しげつた杉すぎの林はやしの間あひだからは、石いしを載のせた村むらの板屋根いたやねや、柿かきの木きや、竹たけ藪やぶや、窪くぼい谷間たにまの畠はたけまで、一め目めに見みえました。そこには父とうさんのお家いへの御先祖ごせんぞさま達たちも、紅あかい椿つばきの花はななぞの咲さくところで靜しづかに眠ねむつて居をりました。

一五 お茶ちやをつくる家いへ

すずめとう
雀が父さんのお家へ覗きに來ました。丁度お家ではお茶をつくる最中でしたから、雀がめづらしさうに覗きに來たのです。

『お前さんのお家ではお茶をつくるんですか。』
と雀が言ひますから、

『え、私の家ではお茶を買つたことが有りません。毎年自分の家でつくりません。』

と父さんが話してやりました。その時、父さんが雀に、あの大きなお釜の方を御覽と言つて見せました。そこではお家の畠で取れたお茶の葉を煮て居る人があります。あの蕈の上を御覽と言つて見せました。そこではお釜から出したお茶の葉をひろげて團扇であほいで居る人があります。あの焙爐の方を御覽と言つて見せま

した。そこでは火の上にかけたお茶の葉を両手で揉んで居る人があります。

『チユウ、チユウ。』

とめづらしいことの好きな雀が鳴きました。そしてめづらしいこととでさへあれば、雀は喜びました。

お家では祖母さんや伯母さんやお雛まで手拭を冠りまして、伯父さんや爺さんと一緒に働きました。近所から手傳ひに来て働く人もありました。好いお茶の香がするのと、家中でみんな働いて居るので、父さんも雀と一緒にそこいらを踊つて歩きました。父さんのお家ではこのお茶ばかりでなく食べる物も着る物も自分のところで造りました。お味噌も家で造り、お醤油も家で造り、

祖母おばあさんや伯母おばさんの髪かみにつける油あぶらまで庭にはの椿つばきの樹きの實みを絞しぼつて
 造つくりました。林はやしにある小梨こなしの皮かはを取とつて來きて、黄色きいろい汁しるで絲いとまで
 染そめました。父とうさんの子こ供どもの時じふん分ぶんには祖母おばあさんの織おつて下くださる着き
 物ものを着き、爺ぢいやの造つくつて呉くれる草履ざうりをはいて、それで學がく校かうへ通かよひ
 ました。さうして、この手造てづくりにしたもの、樂たのしみを父とうさんに教をしへ
 て呉くれたのは、祖母おばあさんでした。
 祖母おばあさんは働はたらくことが好すきで、みんなの先さきに立たつてお茶ちやもつくり
 ましたし、着物きものも根氣こんきに織おりました。祖母おばあさんは隣となりむら村つまかの妻つまか
 籠ごといふところから、父とうさんのお家うちへお嫁よめに來きた人ひとで、曾祖母ひいおばあ
 さんほどの學問がくもんは無ないと言いひましたが、でもみんなに好すかれま
 した。林檎りんごのやうに紅あかい祖母おばあさんの頬ほぺたは、家中いへのもの、心こころを

あたゝめました。

おばあ 祖母さんの着物きものを織おる場所ばしょはお家うちの 玄關げんくわんの側そばの板いたの間まと定きまつて居ゐました。そのお庭にはの見える明あかるい障子しやうじの側そばに祖母おばあさんの腰こしかけ掛かけて織おる機はたが置おいてありました。

『トン／＼ハタリ、トンハタリ。』祖母おばあさんの箴をさが動うごく度たびに、さういふ音おとが聞きこえて來きます。父とうさんが 玄關げんくわんの廣ひろい板いたの間まに居ゐて、その箴をさの音おとを聞ききながら遊あそんで居をりますと、そこへもよくめづらしいもの好ずきの雀すずめが覗のぞきに來きました。

一六 梨なしや柿かきはお友とも達たち

父とうさんのお家うちの庭にはにはいろくな木きが植うゑてありました。父とうさんはその木きを自分じぶんのお友とも達たちのやうに想おもつて大おほきになりました。お前まへたち達たちの祖父おぢいさんのお部屋へやの前まへにあつた古ふるい大おほきな松まつの樹きも、表おもての庭にはにあつた椿つばきの木きもみんな父とうさんのお友とも達たちでした。その椿つばきの木きの側そばには梨なしの木きもあつて、毎まい年ねん大おほきな梨なしがなりました。あの青あをい梨なしの實みのなつた樹きの下したへは父とうさんもよく見みに行いつたものです。

『もう食たべてもいゝかい。』

と父とうさんが梨なしの木きに聞ききに行ゆきますと

『まだ早はやい、まだ早はやい。』

と梨なしの木きは言いつて、なかく食たべてもいゝとは言いひませんでした。

そして、その梨なしの實みが大きいおほ
 御祝言ごしふげんの晩ばんの花嫁はなよめさんのやうに、白しろい紙かみぶくろ袋かみぶくろをかぶつて了しま
 ひました。これは蜂はちが來きて梨なしをたべるものですから、蜂はちをよける
 ために紙かみぶくろ袋かみぶくろをかぶせるのです。お勝手かたての横よこには祖父おぢいさんの植う
 ゑた桐きりの木きがありました。その桐きりの木きの下したは一面めんに桑くは畑はたけでし
 た。お隣となりの高たかい石垣いしがきや白しろい壁かべなどがそこへ行ゆくとよく見みえまし
 た。桑くはの實みの生なる時じぶん分ぶんには父とうさんは桑くはの木きの側そばへ行いつて

『食たべてもいゝかい。』

とたづねますと、桑くはの木きは見みかけによらない優やさしい木きでした。

『あゝ、いゝとも。いゝとも。』

と言いつて呉くれました。父とうさんはうれしくて、あの桑くはの木きに生なる紫む

らさきいろ 色いろの可愛かあいい小ちひさな實みを枝えだからちぎつて口くちに入いれました。
 どぎょう 土藏まへの前まへには、柿かきの木きもありました。父とうさんはよくその柿かきの木きの
 下したへ行いつて遊あそびました。柿かきの木きはまた梨なしや桐きりの木きとちがつて、に
 ぎやかな木きで、父とうさんが遊あそびに行くゆ度に何たがかしら集あつめたいやうな
 ものが木きの下したに落おちて居ゐました。柿かきの花はなの咲さく時じぶん分ゆに行くゆと、あ
 の甘あまい香におひのする小ちひさな花はなが一ぱい落おちて居ゐます。實みの生なる時じぶん分ゆ
 に行くゆと、あへたの蒂へたのついた青あをい小ちひさな柿かきが澤たくさん山お落おちて居ゐます。
 そろゝ木きの葉はの落おちる時じぶん分ゆに行くゆと大おほきな色いろのついた柿かきの葉はが
 そこにもこゝにも落おちて居ゐます。父とうさんはそれを拾ひろひ集あつめるの
 が樂たのしめでした。それほかに他うちのお家うちの柿かきの木きへは登のぼらうと思おもつても登のぼ
 れませんでした。自じぶん分ぶんのお家うちの柿かきの木きばかりは悪わるい顔かほもせず

登のぼらせて呉くれました。父とうさんは枝えだから枝えだをつたつて登のぼつて、時ときに
 ゆすつたりしても柿かきの木きは怒おこりもしないのみか、『もつと遊あそんで
 お出いで。もつと遊あそんでお出いで。』
 と父とうさんに言いひました。

一七 鳥とりけもの 獸けもの もお友とも達だち

山やまの中なかに育そだつた父とうさんは、いろいなる木きをお友とも達だちのやうに思おもつ
 て大おほきくなつたばかりではありません。お前まへ達たちの好すきなお伽とぎば
 話なしの本ほんや雜誌ざっしの中なかに出でて來くるやうな、鳥とりや獸けものまで幼ちひ少さい時じ分ぶんの
 父とうさんにはお友とも達だちでした。

お家にはおいしい玉子を御馳走して呉れる鶏が飼つてありました。父さんが裏庭に出て、桐の木の下あたりを歩き廻つて居ますと、その邊には鶏も遊んで居ました。

『コツ、コツ、コツ。』

と鶏は父さんを見かける度に挨拶します。時には鶏は友達とのしるしにと言つて、白い羽や茶色な羽の抜けたのを父さんに置いて行つて呉れることもありました。

めづらしいお客さまでもある時には、父さんのお家では鶏の肉を御馳走しました。山家のことですから、鶏の肉と言へば大した御馳走でした。その度にお家に飼つてある鶏が減りました。あの締められた首を垂れ眼を白くしまして、羽をむしられる鶏を見て居

ますと、父とうさんはお腹なかの中でハラ／＼しました。これはお客きやくさま
 の御馳走ごちそうですから仕方しかたが無いと思おもひましたが、近所きんじよのお家いへでは、
 闘しやも鶏にはや鶏とりを締しめ殺ころして煮にて食くふといふことをよくやりました。村むら
 には随分ずぶん悪いたづら戯すの好きすな人ひと達たちがありました。さういふ人ひと達たち
 は生いきて居ある闘しやも鶏けの毛けをむしりまして、煮にて食くふ前まへに追おひ廻まはして
 面おも白しろがったものです。あの赤あかはだかに毛けを抜ぬかれた鳥とりがヒヨイ
 〱 飛とび歩あるくのを見みるほど、むごいものは無いと思おもひました。父とう
 さんは子供こども心こころにも、そんな悪いたづら戯すをする村むらの人ひと達たちを何なに程ほど憎にくん
 だか知しれませぬ。
 お家うちの土藏どざうには年としをとつた白しろい蛇へびも住すんで居をりました。その蛇へびは
 土藏どざうの『主ぬし』だから、かまはずに置おけと言いつて、石いし一つ投なげつけ

るものもありませんでした。不思議にもその年とつた蛇へびは動物どうぶつ園えんにでも居ゐるやうに温順おとなしくして居ゐてついぞ悪戯いたづらをしたといふことを聞ききません。父とうさんはめつたにその蛇へびを見みませんでした。が、どうかすると日の映あつた土藏どざうの石垣いしがきの間に身からだ體だけだけ出だして、頭あたまも尻尾しつぽも隠かくしながら日向ひなたぼつこをして居ゐるのを見みかけました。

この土藏どざうについて石段いしだんを降おりて行ゆきますと、お家うちの木小屋きごやがありました。木小屋きごやの前まへには池いけがあつて石垣いしがきの横よこに咲さいて居ゐる雪ゆきの下したや、そこいらに遊あそんで居ゐる蜂はちや蛙かへるなどが、父とうさんの遊あそびに行ゆくのを待まつて居ゐりました。裏木戸うらきどの外そとへ出でて見みますと、そこにはまたお稻荷いなりさまの赤あかい小ちひさな社やしろの側そばに大おほきな栗くりの木きが立たつて居ゐまし

た。風でも吹いて栗の枝の揺れるやうな朝に父さんがお家から馳出して行つて見ますと『誰も來ないうちに早くお拾ひ。』と栗の木が言つて、三つづゝ一組になつた栗の實の毬と一緒に落ちたのを父さんに拾はせて呉れました。高いところを見ると、ワンと口を開いた栗の毬が枝の上から父さんの方を笑つて見て居まして、わざと落ちた栗の在る場所も教へずに、父さんに探し廻らせては喜んで居りました。

『あんなところに落ちて居るのが、あれが見えないのかなア。』とは栗の毬がよく父さんに言ふことでした。栗の木は花からして提灯をぶらさげたやうに滑稽な木でしたし、どうかすると青い栗虫なぞを落してよこして、人をびつくりさせることの好

きな木きぎでしたが、でも父とうさんの好すきな木きでした。

一八 榎木えのきの實み

お家うちの裏うらにある榎木えのきの實みが落おちる時じぶん分ぶんでした。父とうさんはそれを拾ひろふのを樂たのみにして、まだあの實みが青あをくて食たべられない時じぶん分ぶんから、
早はやく紅あかくなれ早はやく紅あかくなれと言いって待まって居ゐました。

爺ぢいや山やまへも木きを伐きりに行ゆくし畑はたけへも野やさい菜さいをつくりに行いつて、何なんでもよく知しつて居ゐましたから、

『まだ榎木えのきの實みは澁しぶくて食たべられません。もう少すこしお待まちなさい
。』とさう申まをしました。

とう
父さんは榎木の實の紅くなるのが待つて居られませんでした。爺
やが止めるのも聞かずに、馳出して木の實を拾ひに行きますと、
たかえだうへ
高い枝の上に居た一羽の櫃鳥が大きな聲を出しまして、

「早過ぎた。早過ぎた。」と鳴きました。

とう
父さんは、枝に生つて居るのを打ち落とすつもりで、石ころや棒を
ひろ
拾つては投げつけました。その度に、榎木の實が葉と一緒になつ
て、パラ／＼パラ／＼落ちて來ましたが、どれもこれも、まだ青
くて食べられないのばかりでした。

そのうちに復た父さんは出掛けて行きました。「大丈夫、榎木
の實はもう紅くなつて居る。」と安心して、ゆつくり構へて出
掛けて行きました。木の實を拾ひに行きますと、高い枝の上に居

た櫃かしどり鳥がまた大きな聲おほこゑを出だしまして、

『遅過おそすぎた。遅過おそすぎた。』と鳴なきました。

父とうさんは、しきりと木きの下したを探さがし廻まはりましたが、紅あかい榎木えのきの實みは一つも見みつかりませんでした。ゆつくり出で掛かけて行ゆくうちに、木きの下したに落おちて居ゐたのを皆みんなほかの子供こどもに拾ひろはれてしまひました。父とうさんがこの話はなしを爺ぢいやにしましたら、爺ぢいやがさう申まをしました。

『一度いちどはあんまり早過はやすぎたし、一度いちどはあんまり遅過おそすぎました。丁ち度好やうどいい時ときを知らなければ、好いい榎木えのきの實みは拾ひろはれません。私わたしがその丁度好ちやうどいい時ときを教をしへてあげます。』と申まをしました。

ある朝あさ、爺ぢいやが父とうさんに『さあ早く拾ひろひにお出いでなさい、丁度好ちやうどいい時ときが來きました。』と教をしへました。その朝あさは風かぜが吹ふいて、榎木えのきの

枝が揺れるやうな日でした。父さんが急いで木の下へ行きますと、
 榎鳥が高い木の上からそれを見て居まして、

『丁度好い。丁度好い。』と鳴きました。

榎木の下には、紅い小さな球のやうな實が、そこにも、こゝにも、
 一ぱい落ちこぼれて居ました。父さんは木の周囲を廻つて、拾つ
 ても、拾つても、拾ひきれないほど、それを集めて楽しみました。
 榎鳥は首を傾げて、このありさまを見て居ましたが、

『なんとこの榎木の下には好い實が落ちて居ませう。澤山お拾
 ひなさい。序に、私も一つ御褒美を出しますよ。それも拾つて行
 つて下さい。』と言ひながら青い斑の入つた小さな羽を高い枝の
 上から落してよこしました。

とう
父さんは榎木の實ばかりでなく、
えのき
榎木の實ばかりでなく、
かしどり
櫃鳥の美しい羽を拾ひ、
うつく
美しい羽を拾ひ、
はね
おま
けにその大きな榎木の下で、
えのき
『丁度好い時。』
ちやうど
『まで覺えて歸つ
おほ
て來ました。』
かへ

一九 木曾の蠅

きそ
木曾は蠅の多いところ
はい
おほ

きそ
木曾には毎年馬市が立つくらゐに、
まいとしうまいち
た
はう
諸方で馬を飼ひますか
うま
か

はい
蠅は何にでも行つて取りつきます。
なん
荷物をつけて通る馬にも取り
にもつ
とほ
うま
と
つけば、
たびびと
旅人の着物にも取りつきます。
きもの
と
はい
蠅は誰とでも直ぐ懇意
たれ
す
こんい

になります。そのかはり誰にでもうるさがられます。こんなうるさい蠅でも、道連れとなれば懐かしく思はれたかして、木曾の蠅のことを發句に讀んだ昔の旅人もありましたつけ。

二〇 蝸

似て、違ふもの——蠅と蝸。蠅はうるさがられ、蝸は恐がられて居ます。蝸は人をも馬をも刺します。あの長くて丈夫な馬の尻尾の房々とした毛は、蝸を追ひ拂ふ《はら》の役に立つのです。父さんが幼少な時分に晝寢をして居ますと、どうかするとこの蝸に食はれることが有りました。その度に、お前達の祖父さ

んが大きな掌で、柄を打ち懲して呉れました。

二一 木曾馬

木曾のやうに山坂の多いところには、その土地に適した馬があります。いくら體格の好い立派な馬でも、平地にばかり飼はれた動物では、木曾のやうな土地には適しません。そこで、石ころの多い坂路を歩いてても疲れないやうな強い脚の力が、木曾生の馬には自然と具はつて居るのです。

木曾馬は小さいが、足腰が丈夫で、よく働くとつて、それを買ひに来る博勞が毎年諸國から集まります。博勞とは馬

の賣買うりかひを商賣しやうばいにする人ひとのことです。木曾きその山地さんちに育そだつた眼め付つきの可愛かあいらしい動物どうぶつがその博勞ばくらうに引ひかれながら、諸國しよこくへ働はたらきに出でるのです。

二二 御嶽参りおんたけまゐり

『チリンく。チリンく。』

山やまが夏なつらしくなると、鈴すずの音おとが聞きこえるやうに成なります。御嶽山おんたけさんに登のぼらうとする人ひと達たちが幾組いくくみとなく父さんちちさんのお家うちの前まへを通とほるのです。馬うまに乗のるか、籠かごに乗のるか、さもなければ歩あるいて旅たびをした以前ぜんの木曾街道きそかいだうの時分じぶんには、父さんちちさんの生うまれた神坂村みさかむらも驛えきの名なを馬ま

籠ごめと言いひました。汽き車しやや電でん車しやの着つくところが今こん日にちのステエシヨ
 ンなら、馬うまや籠かごの着ついた父とうさんの村むらは昔むかしの木き曾そ街かい道だう時じ分ぶんのステエ
 シヨンのあつたところです。ほら、何なに々くの驛えきといふことをよく
 言いふでは有ありませんか。木き曾その山やまの中なかにあつた小ちひさな馬ま籠ごめ驛えきで
 も、言こと葉ばの意い味みに變かはりは無ないのです。丁ちやう度ど、お隣となりで美み濃のの國くに
 の方ほうから木き曾そ路ぢへ入はいらうとする旅たび人びとのためには、一いち番ばん最さい初しよ
 の入いり口ぐちのステエシヨンにあたつて居ゐたのが馬ま籠ごめ驛えきです。
 御おん嶽たけ參まゐりが西にしの方ほうから斯この木き曾その入いり口ぐちに着つくには、六ろく曲きよく
 峠げといふ峠たうげを越こして來こなければなりません。そこが信しな濃のと美み濃の
 の國くに境さかひで、父とうさんの村むらのはづれに當あたつて居ゐます。馬ま籠ごめの驛えきまで來く
 れば御おん嶽たけ山さんはもう遠とほくはない、そのよろこびが皆みんなの胸むねにあるの

です。あの白い着物に、白い鉢巻をした山登りの人達が、腰にさげた鈴をちりん／＼鳴らしながら多勢揃つて通るのは、勇しいものでした。

二三 芭蕉翁の石碑

お前達は芭蕉翁の名を聞いたことが有りませう。あの芭蕉翁の木曾で讀んだ發句が石に彫りつけてあります。その古い石碑が馬籠の村はづれに建てゝあります。美濃の國境に近いところに、それがあります。

『朝を思ひ、また夕を思ふべし。』

と芭蕉翁は教へた人です。

二四 お百草

御嶽山の方から歸る人達は、お百草といふ薬をよく土産
 に持つて來ました。お百草は、あの高い山の上で採れるいろ
 くな草の根から製した練薬で、それを竹の皮の上に延べて
 あるのです。苦い薬でしたが、お腹の痛い時などにそれを飲
 むとすぐなほりました。お薬はあんな高い山の土の中にも藏つて
 あるのですね。

二五 檜木笠 ひのきかさ

麥藁むぎわらでさへ帽子ぼうしが出来できるのに、檜木ひのきで笠かさが造つくれるのは不思議ふしぎでもありません。

木曾きそは檜木ひのきの名所めいしよですから、あの木きを薄うすい板いたに削けづりまして、笠かさに編あんで冠かぶります。その笠かさの新しいあたいのは、好いい檜木ひのきの香氣にほひがします。木曾きその檜木ひのきは材木ざいもくとして立派りつぱなばかりでなく、赤味あかみのある厚あつい木きの皮かはは屋根板やねいたの代かはりにもなります。まあ、あの一ト擁かへもふたか擁かへもあるやうな檜木ひのきの側そばへ、お前達まへたちを連つれて行いつて見みせたい。

二六 ふるさとの言葉ことば

やまはやしとう
 山や林は父さんのふるさとですと、お前達まへたちにお話はなししましたらう。
 やまはやし
 山や林ばかりでなく、言葉ことばも父さんのふるさとです。
 なかむら
 中の村ですから、言葉ことばのなまりも鄙ひなびては居ゐますが、人ひとの名前なまへの
 よかた
 呼び方かたからして馬籠まごめは馬籠まごめらしいところが有あります。たとへば、
すゑこ
 末子すゑこのやうなちひさな女をんなの子を呼よぶにも、

『末すゑさま。』

と言いつたり、もつと親したしい間あひだ柄がらで呼よぶ時ときには、

『末すゑさま』

と言いつたりしまして、鄙ひなびた言葉ことばの中なかにも何處どこか優やさしいところが

無いでもありません。

父さんの田舎には『どうねき』などといふ言葉もあります。もう
 仕末におへないやうな人のことを『どうねき』と言ひます。こん
 な言葉は木曾にだけ有つて、他の土地には無いのだらうかと思ひ
 ます。それから、『わやく』といふやうな言葉もあります。『い
 たずらな子供』といふところを『わやくな子供』など、言ひます。
 ふるさとの言葉はこひしい。それを聞くと、父さんは自分の子供
 の時分に歸つて行くやうな氣がします。お前達の祖父さんでも、
 祖母さんでも、みんなその言葉の中に生きていらつしやるやうな
 氣がします。

二七 お百姓の苗字

とう
父さんの田舎の方には働くことの好きなお百姓が住んで居ます。
い
今でこそあの人達に苗字の無い人はありませんが、昔は庄
やうきち
吉とか、春吉とかの名前ばかりで、苗字の無い人達が澤
くさん
山あつたさうです。明治のはじめを御維新の時と言ひまして、
ご
あの御維新の時から、どんなお百姓でも立派な苗字をつけ
ることに成つたさうです。

とう
父さんのお家にも出入のお百姓が
ひやくしやう
姓がありまして、お餅をつくとか、お茶をつくるとかいふ日には、屹度お手傳ひに來て呉れました。あの人達はお前達の祖父さんのことを『お師匠さま、

お師匠さまししやうと呼んで居ました。あの人達ひとたちが苗字めうじをつける時ときのことを今いまから思おもひますと、

『お師匠ししやうさま、孫子まごこに傳つたはることでございますから、どうかまあ私わたしどもにも好よささうな苗字めうじを一つお願ねがひ申まをします。』

斯かうもあつたらうかと思おもひます。そして、大脇おほわきの脇わきの字じを分わけて貰もらふとか、蜂谷はちやの谷やの字じを分わけて貰もらふとかして、いろ／＼な苗字めうじが村むらにふえて行いつたらうかと思おもひます。

二八 狐きつねの身みのうへ上ばなし話

お稻荷いなりさまは五穀ごこくの神かみを祀まつつたものですとか。五穀ごこくとは何なんと何なんで

せう。米こめに、麥むぎに、粟あはに、黍きびに、それから豆まめです。粟あはは粟餅あはもちの
 粟あは、黍きびはお前まへ達たちのお馴染なじみな桃もも太郎たらうが腰こしにさげて居ゐる黍團子きびだんご
 の黍きびです。父とうさんのお家うちの裏うらにも、斯このお百ひやく姓くしやうの神かみ様さまが祀まつ
 つてありました。赤あかい鳥居とりゐの奥おくにある小ちひさな社やしろがそれです。二月ぐわつ
 はつうまひ初はつ午まの日ひには、お家うちの爺ぢいやが太鼓おほを持もち出して、その社やしろの
 側わきの櫻さくらの枝えだの木きに掛かけますと、そこへ近きん所じよの子こ供どもが集あつまりまし
 た。父とうさんもその太鼓たいこを叩たくの樂たのみにしたものです。
 お前まへ達たちはあゑの繪ゑ馬まを知しつて居ゐますか。馬うまの繪ゑをかいた小ちひさな額がく
 が諸はう方／＼の社やしろに掛かけてあるのを知しつて居ゐますか。あゑの額がくの中なかに
 は『奉納ほうなふ』といふ文字もじと、それを進あげた人ひとの生うまれた年としなぞが書か
 いてあるのに氣きがつきましたか。父とうさんのお家うちの裏うらに祀まつつてある

お稲荷さまの社にも、あの繪馬がいくつも掛つて居ました。それから、白い狐の姿をあらはした置物も置いてありました。そのしろぎつね白狐はあたりまへの狐でなくて、寶珠の玉を口にくはへて居ました。

『お前さんがお稲荷さまですか。』

と父さんがその狐にきいて見ました。さうしましたら白狐の答へるには、

『どうしまして。私はお稲荷さまの使ひですよ。この社の番人ですよ。私もこれで若い時分には随分いたずらな狐でして、諸方の畠を荒しました。一體、私の幼少な時分には、ごく弱かつたものですから、この白狐はこれでも育つかしら、と皆に

言はれたくらゐださうです。その私を可哀さうに思つて、おやぎつ 親

狐ねは私の言いふなりに育そだて、呉くれましたとか。私わたしは他の言いふこと

なぞを聞きかないで、自分じぶんのしたい事ことをしました。鶏にはとりが食たべたけれ

ば、鶏にはとりを盗ぬすんで來きました。そんな眞ま似ねをして、もう我わたし儘ま一いつぱい

に振舞ふるまつて居をりますうちに、だん／＼私わたしは獨ひとりぼつちに成なつて

しまひました。誰たれも私わたしとは交際つきあはなくになりました。私わたしの眼めが覺さめ

る時分じぶんには、誰だれも私わたしの言いふことを本當ほんたうにして呉くれる者ものはありま

せんでした。御覽ごらんの通とほり、私わたしは今いま、お稻荷いなりさまの社やしろの番人ばんにんをし

て居ゐます。私わたしのやうな狐きつねでも生うまれ變かはつたやうになれば、斯かうして

社やしろの番人ばんにんをさして頂いたげるのです。私わたしがもう若い時分じぶんのやうな惡い

戯たづな狐きつねでない證しょうこ據こには、この私わたしの口くちを御覽ごらんになつても分わりま

す。私わたしがお稲荷いなりさまのお使つかひをして歩あるく度たびに、この口くちにくはへて居ゐる寶珠ほうじゆの玉たまが光ひかります。』
とさう申まをしました。

二九 生徒せいとさん、今日こんにちは

村むらの學がく校かうの生徒せいとが石垣いしがきの間あひだの細ほそい道みちを歸かへつて來きますと、こち
らの石垣いしがきから向むかふの石垣いしがきの方ほうへ通りぬけようとする鼠ねずみがあり
ました。丁度ちやうど、村むらでは惡いたづら戲ねずみうはさをした鼠ねずみの噂つたが傳つたはつて居ゐる頃ころで
した。いかにそゝツかしい山家やまがの鼠ねずみでも、そこに寢ねて居ゐる女をんなの人ひと
の鼻はなを間ま違ちがへて、お芋いもかなんかのやうに食たべようとしたなんて、

そんなことはめつたに聞かない悪戯ですから。

学校の生徒に逢つた鼠は賢い鼠でした。他所の鼠の悪戯から、自分までその仕返しをされては堪らないと思ひましたから、先づ自分までその仕返しをされては堪らないと思ひましたから、先づ自分の鼻を大事さうにおさへて居まして、それから斯う挨拶しました。

『生徒さん、今日は。』

三〇 黒い蝶蝶

ある日のことでした。父さんはお家の裏木戸の外をさん／＼遊び廻りまして、木戸のところまで歸つて來ますと、高い枳殻の

木きの上うへの方に卵たまごでも産うみつけようとして居ゐるやうな大おほきな黒くろい蝶て々くを見みつけました。

いろ／＼な可か愛あいらしい蝶て々くも澤たく山さんある中なかで、あの大おほきな黒くろい蝶て々くばかりは氣き味みの悪わるいものです。あれは毛け蟲むしの蝶て々くだと言いひます。何なんの氣きなしに父とうさんはその蝶て々くを打うち落おつつもりで、木き戸どの内うちの方ほうから長ながい竹たけ竿ざんを採さがして來きました。ほら、枳から殻たちといふやつは、あとほの通とほりトゲの出でた、枝えだの込こんだ木きでせう。父とうさんが蝶て々くをめがけて竹たけ竿ざんを振ふる度たびに、それからたち枳えだ殻たちの枝えだを打うつて、青あをい葉はがバラ／＼落おちました。

そのうちに蝶て々くは父とうさんの竹たけ竿ざんになやまされて、手て傷きずを負おつたやうでしたが、まだそれにでも逃にげて行いかうとはしませんでした。

そこいらにはもう誰も人の居ない頃で、木戸に近いお稻荷さまの
 小さな社から、お家の裏手にある深い竹藪の方へかけて、何も
 かも、ひっそりとして居ました。大きな蝶々だけが氣味の悪い
 黒い羽をひろげて、枳殻のまはりを飛んで居ました。それを見
 ると、父さんはその蝶々を殺してしまはないうちは安心の出
 來ないやうな氣がして、手にした竹竿で、滅茶々に枳殻の
 枝の方を打つて置いて、それから木戸の内へ逃げ込みました。
 未だに父さんはあの時のことを忘れません。母屋の石垣の下に
 ある古い池の横手から、ひっそりとした木小屋の前を通り、井戸
 の側の石段を駆け登るやうにしまして、祖母さん達の居る方へ
 急いで歸つて行つた時のことを忘れません。

それにつけても、父とうさんはある亞米利加人あめりかじんの話を思おもひ出だします。その亞米利加人あめりかじんがまだ子供こどもの時じぶん分に龜かめの子こを打うつた話を思おもひ出だします。生うまれて初はじめて『悪わるい』といふ事ことをほんたうに知しつた、自分じぶんで悪わるいと思おもひながら復また棒ぼうを振ふりあげくして龜かめの子こを打うつのに夢む中ちゆうになつてしまつた、あんな心こゝろもち持はは初はじめてだ、さう亞米利加人あめりかじんの話はなしの中なかに書かいてあつたことを思おもひ出だします。その亞米利加人あめりかじんが母は、おや親おやから言いはれた言葉ことばを引ひいて、あれが自分じぶんの『良りやう心しんの眼めざめ』だ、自分じぶんが一生しやううちの中なかのどんな出来事できごとでもあんなに深ふかく長ながつづきつづきつづのして残のこつたものはない、とその話はなしにも言いつてありましたつつけ。

三一 梨なしの木きの下した

子どもが片足かたあしづゝ揚あげて遊あそぶことを、東京とうきやうでは『ちんくま
ごくく』と言いひませう。土地とちによつては『足拳あしけん』と言いふところ
も有あるさうです。父とうさんの田舎あなの方ほうではあの遊あそびのことを『ちん
ぐら、はんぐら』と言いひます。

問屋とんやの三郎らうさんは近所きんじよの子供こどもの中なかでも父とうさんと同おない年としでして、
好いい遊あそび友とも達だちでした。父とうさんがお家うちの表おもてに出でて遊あそんで居をります
と、何時いつでも坂さかの上うへの方ほうから降おりて來きて一しよ緒なに成なるのは、この三
郎らうさんでした。二人ふたりは片足かたあしづゝ揚あげまして、坂さかになつた村むらの往わ
來うらいを『ちんぐら、はんぐら』とよあそびました。

ある日の夕方ひ ゆふがたの事こと、父さんとうは何かなにの事ことで三郎さんらうと争あらそひまして、この好よい遊あそび友とも達たちを泣なかせてしまひました。三郎さんらうの祖母おばあさんといふ人ひとは日頃ひごろ三郎さんらうを可か愛あいがつて居ゐましたから、大層たいそう立腹たふくして、父さんとうのお家うちへ戻ねり込んで來きたのです。問屋とんやの祖母おばあさんと言いへば、なか／＼負まけては居ゐない人ひとでしたからね。父さんとうはお家うちへ歸かへればきつと叱しかられることを知しつて居ゐましたから、しよんぼりと門もんの内なかまで歸かへつて行いきました。お家うちには廣ひろい板いたの間の玄げん關くわんと、田舎風あなかふうな臺だい所どころの入口いりぐちと、入口いりぐちが二つになつて居ゐましたが、その臺だい所どころの入口いりぐちから見みますと、爐邊ろばたではもう夕飯ゆふはんが始はじまつて居ゐました。ところが誰だれも父さんとうに『お入はいり』と言いふ人ひとがありません。『早はやく御飯ごはんをおあがり』と言いつて呉く

れる者も有りません。父さんは自分のしたことで、こんなに皆を怒らせてしまつたかと思ひました。そのうちに、

『お前はそこに立つてお出で。』

といふ伯父さんの聲を聞きつけました。あのお前達の伯父さんが、父さんには一番年長の兄さんに當る人です。父さんは問屋の三郎さんを泣かせた罰として、庭に立たせられました。あか／＼と燃える樂しさうな爐の火も、みんなが夕飯を食べるさまも、庭の梨の木の下からよく見えました。爺やは心配して、父さんと言ひなだめに來て呉れましたが、父さんは誰の言ふ事も聞き入れずに、みんなの夕飯の濟むまでそこに立ちつくしました。斯ういう場合に、いつでも父さんを連れに來て呉れるのはあのお

雛ひなで、お雛ひなは父とうさんのために御飯ごはんまでつけて呉くれましたが、到とうと頭うその晩ばんは父とうさんは食たべませんでした。
 おろおろ愚おろかな父とうさんは、好ことい事ことでも悪わるい事ことでもそれそれを自じ分ぶんでして見みた上うへでなければ、その意い味みをよく悟さとることが出で来きませんでした。その
 かはり、一いち度ど懲こりたことは、めつたにそれそれを二に度どする氣きにならな
 かつたのは、あなしの梨きの木したの下たに立たたせられた晩ばんの事ことをよくく
 忘わすれずに居ゐたからであります。

三二 翫おも具ちやは野のにも畠はたけにも

父とうさんの幼ちひ少さい時ときのやうに山やまの中なかに育そだつた子こ供どもは、めつたに翫おもち

具やを買かふことが出来できません。假令たとへ、欲ほしいと思おもひましても、それを賣うる店みせが村むらにはありませんでした。

翫おも具ちやが欲ほしくなりますと、父とうさんは裏うらの竹たけ藪やぶの竹たけや、麥むぎばたばた畠けに乾ほしてある麥むぎ藁わらや、それから爺ぢいやが野菜やさいの畠はたけの方ほうから持もつて來くる茄子なすだの南たう瓜なすだの、中なかへよく探さがしに行ゆきました。

爺ぢいやが畠はたけから持もつて來くる茄子なすは、父とうさんに帯へたを呉くれました。そのなすなすの帯へたを兩りやう足あしの親おや指ゆびの間あひだにはさみまして、爪つま先さきを立てた、あるある歩あるきますと、丁ちやうど度ど小ちひさな沓くつをはいたやうで、嬉うれしく思おもひました。南たう瓜なすも父とうさんに、帯へたを呉くれました。

『御覽ごらん、私わたしの帯へたの堅かたいこと。まるで竹たけの根ねのやうです。これをお前まへさんの兄にいさんのところへ持もつて行いつて、この裏うらの平たひらなところ

へ何か彫ほつてお貰もらひなさい。それが出来できたら、紙かみの上うへへ押おして御ご覧らんなさい。面白おもしろい印いんぎやう行ぎやうが出来できますよ。』

と南たうなす瓜うりが教をしへて呉くれました。

裏うらの竹たけ藪やぶの竹たけは父とうさんに竹たけの子こを呉くれました。それで竹たけの子この手て桶けを造つくれ、と言いつて呉くれ《く》ました。

『こいつも、おまけだ。』

と細ほそく竹たけの割わつたのまで呉くれてよこしました。その細ほそい竹たけを削けづりまして、竹たけの子この手て桶けに差さしますと、それで提さげられるやうに成なるのです。水みづも汲くめます。父とうさんは表おもてには庭なしの梨なしの木きや椿つばきの木きの下したあたりへ小ちひさな川かはのかたちをこしらへました。寄よせ集あつめた砂すなや土つちをふたれつつに盛もりまして、その中なかへ水みづを流ながしては遊あそびました。竹たけ

の子の手桶で提げて行つた水がその小さな川を流れるのを楽しみました。

麥 畠に熟した麥は、父さんに穂先の方の細い麥藁と、胴
 か ほうふと むぎわら
 中の方の太い麥藁とを呉れました。

『是をどうするんですか。黄色い麥藁でなけりや不可んですか。』

と父さんが聞きましたら、麥の言ふには、

『十二、青いんでもかまひませんが、なるなら黄色い方がいゝ。
 麥は熟するほど丈夫ですからね。この細い麥藁の穂先の方を
 軽く折つてお置きなさい。氣をつけてしないと、折れて、とれて
 しまひますよ。それから太い麥藁の節のある下のところを一寸

ばかりお前まへさんの爪つめでお裂さきなさい。これも氣きをつけてしないと、みんな裂さけてしまひますよ。太ふとい麥藁むぎわらには必かならず一いつぱう方に節ふしのあるのが要いります。それが出でき來きましたら、細ほそい方の麥藁むぎわらを太ふとい麥むぎわらさの裂さけたところへ差さし込こむやうになさい。』

成程なるほどむぎ麥いの言いふ通とほりにしましたら、子供こどもらしい翫具おもちゃが出でき來きました。細ほそい麥藁むぎわらを下したから引ひく度たびに、麥むぎの穂先ほさきが動うごきました。『今こんにち日は、今日こんにちは』と言いふやうに見みえました。

とう父とうさんは、種いろく々な翫具おもちゃが野のにも畠はたけにもある事ことを知しりました。たけやぶ竹たけやぶ藪たけから取とつて來きた青あをい竹たけの子こ、麥むぎ畠はたけから取とつて來きた黄きいろ色いろい麥藁むぎわらで、翫具おもちゃを手造てづくりにする事ことの言いふに言いはれぬ樂たのしい心こころ持もちを覺おぼえました。

はたけすみ 畠の隅に 堤 燈 をぶらさげたやうな 酸 醬 が、父さんに 酸 醬
 の實を呉れまして、その心を出してしまつてから、古い筆の軸で
 吹いて御覽と教へて呉れました。筆の軸は先の方だけを小 刀 か
 なに 何かで幾つにも割りまして、朝顔のかたちに折り曲げるとい
 うのです。その受口へ玉のやうにふくらめた 酸 醬 をのせ、下か
 ら吹きましたら、軽い 酸 醬 がくるくると舞ひあがりました。そ
 して朝顔なりの管の上へ面白くやうに落ちて來ました。

三三 旅の飴屋さん

父さんの村へも、たまには 飴屋さんが通りました。旅の 飴屋さん

は、天平棒でかついて来た荷を村の石垣の側におろして、面おも白しろをかしく笛ふえを吹ふきました。

なんと、飴屋あめやさんの上手じやうずに笛ふえを吹ふくこと。飴屋あめやさんは棒ぼうの先さきに巻まきつけた飴あめを父とうさんにも賣うつて呉くれまして、それから斯かう言いひました。

『さあ、おいしい飴あめですよ。これを食たべて、おとなしくして居ゐて下くださると、復また私わたしが飴あめをかついで来てあげますよ。』

日に焼やけて旅たびをして歩あるく斯この飴屋あめやさんは、何處どこか遠とほいところからかついで來きた荷にを復また肩かたに掛かけて、笛ふえを吹ふきく出で掛かけました。

あの飴屋あめやさんの吹ふく笛ふえは、そこいらの石垣いしがきへ浸しみて行いくやうな音色ねいろでした。

三四 水晶のお土産

ある日、父さんは人に連れられて梵天山といふ方へ行きました。
 赤い躑躅の花なぞの咲いて居る山路を通りまして、その梵天
 山へ行つて見ますと、そこは水晶の出る山でした。父さん
 はめづらしく思ひまして、あちこちと見て歩いて居ますと、路ば
 たに大きな岩がありました。その岩が父さんに、彼處を御覽、こゝ
 を御覽、と言ひまして、半分土のついた水晶がそこいらに
 散らばつて居るのを指して見せました。

『あそこにも水晶の塊がありますよ。』

とまた岩が父さんに指して見せました。その水晶は千本濕地といふ茸のかたまつて生えたやうに、枝に枝がさしたやうになつて居まして、その枝の一つ一つが、みんな水晶の形をして居ました。

『こんなところから水晶が出るんですか。』
と父さんが聞きましたら、

『えゝ、さうです。水晶はみんな斯うして生れて來ます。人は遠いところにはかり眼をつけて、足許に落ちて居る寶石を知らずに居ますよ。さういふお前さんは、この山は初めてですか。よく來て下さいました。山の土産に、あそこに落ちて居る美しい水晶でも一つ拾つて行つて下さい。』

斯うその岩が答へました。

父さんはそこいらを探し廻りまして、眼についた水晶の中すゐしやうなかでも一番光つたのを土産みやげに持つて歸りました。

三五 雄鷄の冒険おんどり ぼうけん

若い雄鷄おんどりがありました。

他の鷄と同じやうに、この雄鷄も人の家に飼はれて大きくなりおほました。小さな雛ツ子の時分から、雄鷄は自分で飛べないものおほとばかり思つて居ましたが、だん／＼大きくなるうちに、自己じぶんに生えて居る羽を見てびつくりしました。

雄おんどり鶏どりはまだ若わかくて元氣げんきがありましたから、こんな立派りつぱな羽はねがあるなら一つこれで飛とんで見みたいと思おもふやうに成なりました。そこで林はやしの方ほうへ出掛でかけて行いきまして、他ほかの鳥とりと同おなじやうに飛とばうとしました。林はやしには百舌もずが遊あそんで居ゐました。百舌もずは雄おんどり鶏どりの方ほうを見ては笑わらひました。そこへ鶺鴒ひはも舞まつて來きました。鶺鴒ひはは雄おんどり鶏どりの方ほうを見て、百舌もずと同おなじやうに笑わらひました。何なんど度も何なんど度も雄おんどり鶏どりは木きの枝えだへ上のぼりまして、そこから飛とばうとしましたが、その度たびに羽はねをばた／＼させて舞まひ降おりてしまひました。

百舌もずには笑わらはれる、鶺鴒ひはにも笑わらはれる、そのうちおんどりに雄おんどり鶏どりは餌えを欲ほしくなりましたが、林はやしの中なかにある木きの實みや虫むしはみんな他ほかの鳥とりに早はやく拾ひろはれてしまひました。誰だれも雄おんどり鶏どりのためために米こめ粒つぶ一つひとつまいて

呉れるものも有りませんでした。でも、この雄鶏は若かつたものですから、どうかして飛んで見たいと思ひまして、木の枝へ上つて行つては羽をひろげました。その度に舞ひ降りるばかりでした。

雄鶏はもう高い聲で関をつくるやうな勇氣も挫けまして、

『クウく、クウく。』

と拾ふ餌もなく鳴きました。

そこへ山鳩が通りかゝりました。山鳩は林の中に聞き慣れない鶏の鳴聲を聞きつけてまして、傍へ飛んで來ました。百舌や鶯とちがひ、山鳩は見ず知らずの雄鶏をいたはりました。

『もうすこしの辛抱——もうすこしの辛抱——』

と鳴いて、山鳩は林の奥の方へ飛んで行きました。

餓えた雄鶏は一生懸命に餌を探しはじめました。他の鳥に

拾はれないうちに、自分で木の實や虫を見つけたためには、否で

も應でも飛ばなければ成りませんでした。その時になつて、初め

て雄鶏の羽が動いて來ました。そして餌らしい餌にありつきま

した。

雄鶏はこの林へ飛びに來て見て、鷹があんな高い空を舞つて歩

くのも、自分で餌を見つげに行くのだといふことを知りました。

三六 たなばたさま

三月、五月のお節句は、楽しい子供の祭りです。五月のお節句は、父さんのお家でも石を載せた板屋根へ菖蒲をかけ、爺やが松林の方から採つて来る笹の葉で粽をつくりました。七月になりますと、又、たなばたさまのお祭りの日が山の中の村へも來ました。

たなばたさまのお祭りに飾る竹は、あれは外國の田舎家で飾るといふクリスマススの木にも比べて見たいやうなものです。墨や紅を流して染めた色紙、または赤や黄や青の色紙を短冊の形に切つて、あの青い竹の葉の間に釣つたのは、子供心にも優しく

思おもはれるものです。

三七 巴且杏はたんきやう

巴且杏はたんきやうの生なる時分じぶんには、お家の裏うちうらのお稻荷いなりさまの横手よこてにある古ふるい木きにも、あの實みが密集かたまつて生なりました。父とうさんは自分じぶんの子供こどもの時分じぶんと、あの巴且杏はたんきやうの生なる時分じぶんとを、別々べつべつにして思おもひ出だせないくらゐです。巴且杏はたんきやうは李すもより大おほきく、味あぢも李すものやうに酸すくはありません。あの木きは、先さきの方ほうの少すこし尖とがつて角つのの出でたやうな、見みたばかりでもおいしさうに熟じゆくしたやつを毎まい年ねんどつさり父とうさんに御馳走ごちそうして呉くれましたつけ。

なが
が流れて居ましたから。父さん達は竿を持つて行きまして、石の
あひだかく
間に隠れて居る鰍を追ひました。

もしかして竿のかはりに釣竿をかついで、何かもつと他の魚を
も釣りたいと思ふ時には、爺やに頼んで釣竿を造つて貰ひまし
た。

斯ういふ遊びにかけては、友伯父さんはなか／＼※心でした。な
にしろ父さんの村には釣の道具一つ賣る店もなかつたものですか
ら、釣竿の先につける糸でも何でもみんな友伯父さんが爺やに
てつだ
手傳つて貰つて造りました。糸は栗の木の虫から取りました。そ
の栗の木の虫から取れた糸を酢に浸けて、引き延ばしますと、木
ごや
小屋の前に立つ爺やの手から向ふの古い池の側に立つ友伯父さん

の手てに届とどくほどの長ながさがありました。それを日ひに乾ほして、釣つり竿ぎの糸いとにつつくくことなどは、友伯父ともをぢさんも好すきでよくやりました。この釣つりの道具だうぐを提さげて、友伯父ともをぢさん達たちと一いつ緒しよに復また胡桃くるみの木きの見える谷たにあひ間あひへ出で掛かけますと、何時いつでも父とうさんは魚さかなに餌えを取とられてしまふか、さもなければもう面倒めんどう臭くくなつて釣つり竿ぎで石いしの間あひだをかき廻まはすかしてしまひました。そしてお家うちの方ほうへ歸かへつて來くる度たびに、

『釣つり竿ぎばかりでは、魚さかなは釣つれませんよ。』

と爺ぢいやに笑わらはれました。

三九 祖母おばあさんの鍵かぎ

お前まへ達たちの祖母おばあさんのことは、前まへにもすこしお話しはなししたと思おもひます。祖母おばあさんは、父とうさんが子供こどもの時じぶん分の着物きものや帯おびまで自分じぶんで織おつたばかりでなく、食たべるもの——お味噌みそからお醤油しやうゆ油たぐひの類たぐひまでお家うちでつく、お婆おばあさんが自分じぶんの髪かみにつける油あぶらまで庭にはの椿つばきの實みから絞しぼりまして、物ものを手造てつくりにすることの樂たのしみを父とうさんに教をしへて呉くれました。『質素しつそ』を愛あいするといふことを、いろ／＼な事ことで父とうさんに教をしへて見みせて呉くれたのも祖母おばあさんでした。祖母おばあさんはよく※い鹽あつしほのおむすびを庭にはの朴ほうの木きの葉はにつゝみまして、父とうさんに呉くれました。握にぎりたてのおむすびが彼様あうすると手てにくつつきませんし、その朴ほうの葉はの香氣にほひを嗅かぎながらおむすびを食たべるのは樂たのしみでした。

この祖母おばあさんとい言へば、ひろ廣いげんくわん玄關の側わきの板いたの間まではた機をお織りな
 ながら腰掛こしかけて居ゐる人ひとと、みそぐら味噌藏の側わきの土藏どざうの前まへに立たつて大おほきな鍵かぎ
 を手てにして居ゐる人ひととが、いま今でもとうすぐに父とうさんの眼めに浮うかんで來きます。
おぼあ祖母さんの鍵かぎはかなあみ金網の張はつてある重おもい藏くらの戸とをああける鍵かぎで、ひも紐
いたきれと板片いたきれをつけた鍵かぎで、はこいろ／＼な箱はこに入はひつた器物うつはを藏くらから取とりだ出
かぎす鍵かぎでした。おぼあ祖母さんがおよめきに來きた時ときの古ふるい長なが持もちから、お前ま
へたち達おちいの祖父おちいさんの集あつめた澤たくさん山ほんばこな本箱ほんばこまで、その藏くらの二階かいにし
あまつて有ありました。おぼあ祖母さんはあかぎの鍵かぎの用ようが濟すむと、藏くらの前まへの石い
しだん段おを降おりて、かき柿かきの木きの間あひだを通とほりましたが、そことうに父とうさんがよく
あそ遊あそんで居ゐたのです。みそぐら味噌藏みそぐらの階上うへには住居すまゐに出來できた二階かいがありま
 した。そこまへたちがお前まへたち達の曾祖母ひいおばあさんの隱居ゐんき部屋よべやになつて居ゐました。

四〇 祖父さんの好きな御幣餅

木曾の御幣餅とは、平たく握つたおむすびの小さいのを二つ三つぐらゐづゝ串にさし、胡桃醬油をかけ、爐の火で焼いたのを言ひます。その形が似て居るから御幣餅でせう。人々は爐邊に集りまして、焼きたてのおいしいところを食べるのです。お前達の祖父さんは、この御幣餅が好きでした。日頃村の人達から『お師匠さま、お師匠さま。』と親しきうに呼ばれて居たのも、この御幣餅の好きな祖父さんでした。祖父さんは學問の人でしたから、『三字文』だの『勸學篇』

だのといふものを自分で書いて、それを少年の讀本のやうにして、幼少な時分の父さんに教へて呉れました。山の中にあつた父さんのお家では、何から何まで手製でした。手習のお手本から讀本まで、祖父さんの手製でした。

四一 お隣りの人達

お隣りの大黒屋は酒を造る家でした。その家でお風呂が立てば父さんのお家へ呼びに來ましたし、父さんのお家でお風呂が立てばお隣りからも呼ばれて入りに來ました。田舎のことで、日が暮れてからお隣りまでお風呂を呼ばれに行くにも、祖母さん達は

提灯ちやうちんつけて通かよひました。二軒けんの家うちのものは、それほど親したしく
 往いつたり來きたりしましたから、子供こども同志どうしも互たがひに親したしい遊あそび友とも達だち
 でした。それに、お隣となりの鐵てつさんでも、その妹いもうとのお勇ゆうさんでも、
 祖父おぢいさんのお弟子でしとして父とうさんのお家うちへ通かよつて來きました。父とうさん
 のお家うちの方ほうから見みますと、大黒屋だいこくやは一段いちだんと高たかい石垣いしがきの上うへに
 ありまして、その石垣いしがきのすぐ下したのところまで父とうさんのお家うちの桑く
 はばたけはばたけ 畠つづが續つづいて居ゐましたから、朝日あさひでもさして來くるとお隣となりの家うち
 の白しろい壁かべがよく光ひかりました。
 父とうさんはこゝでお前まへ達たちに、自分じぶんの生うまれたお家うちのこともすこしお
 話はなししようと思おもひます。父とうさんのお家うちは昔むかしは本陣ほんちんと言いひまして、
 村むらでも舊ふるいゝお家うちでした。父とうさんの幼少ちひさな時分じぶんには、昔むかしのお大だ

いみやう 名が木曾路を通る時に泊まつたといふ古い部屋まで残つて居
 ました。部屋々々には、いろ／＼な名前が昔からつけてありまし
 て、上段の間、奥の間、中の間、次の間、それから寛ぎの間
 なぞといふのが有りました。祖父さんはいつでも書院に居まし
 た。父さんもその書院に寝ましたが、曾祖母さんが獨りで寂し
 いといふ時には離れの隠居部屋へも泊りに行くことが有りました。
 祖父さんの書院の前には、白い大きな花の咲く牡丹があり、古
 い松の樹もありました。月のいゝ晩なぞには松の樹の影が部屋の
 障子に映りました。この書院から中の間へつゞく廊下のあた
 りは、父さんのよく遊んだところです。中の間はお家のなかでも
 一番明るい部屋でして、遠く美濃の國の方の空までその部屋から

見みえました。祖母おばあさんや伯母おばさんが針仕事はりしごとをひろげるのもその
 部屋へやでしたし、父とうさんが武者繪むしやゑの敷寫しきうつなどをして遊ぶあそのもそ
 の部屋へやでしたし、お隣となりのお勇ゆうさんが手習てならひに來きて祖父おぢいさんの書か
 いたお手本てほんを習ならふのもその部屋へやでした。
 お隣となりの鐵てつさんは、父とうさんのお家うちの友伯父ともをぢさんと同おない年どしぐらゐで、
 一いっ緒しょに遊ぶあそぶにも父とうさんの方ほうがいくらか弟おとうとのやうに思おもはれるとこ
 ろが有ありました。近きん所じよの子供こどもの中なかで、遊あそんで氣きの置おけないのは、
 問屋とんやの三郎らうさんに、お隣となりのお勇ゆうさんでした。この人ひと達たちは父とうさ
 んと同おない年どしでした。祖父おぢいさんは字じを書かくことが好すきで、赤あかい毛もうせ
 氈んの上うへへ大おほきな紙かみをひろげて、夜よ遅おそくなるまで何なにかよく書かきま
 したが、その度たびに眠ねむい眼めをこすりく蠟燭らふそくを持もたせられるのは

お勇さんや父さんの役目でした。

末子よ。お前は『おばこ』といふ草の葉を採つて遊んだことが有りますか。あの草の葉は糸にぬいて、みんなよく織る真似をして遊びませう。お隣りのお勇さんもあの『おばこ』を採つて來て織ることを楽しみにするやうな幼い年頃でした。

四二 屋號

どこの田舎にもあるやうに、父さんの村でも家毎に屋號がありました。大黒屋、俵屋、八幡屋、和泉屋、笹屋、それから扇屋といふやうに。

笹屋ささやとは笹ささのやうに繁しげる家いえ、扇屋あふぎやとは扇あふぎのやうに末すゑの廣ひろがる家いえといふ意味いみからでせう。でも笹屋ささやと言いつてもそれを『笹ささの家や』とおも思おもふものもなく、扇屋あふぎやと言いつても『扇あふぎの家や』とおも思おもふものはありません。屋號やがうといふものは、その家いえ々々の符牒ふてふのやうに思おもはれて居ゐるものでした。

四三 お墓参りの道はかまるみち

村むらの人達ひとたち——殊ことに女をんなの人達ひとたちの通とほる裏道うらみちは並ならんだ人家じんかに添そふて村むらの裏側うらがはに細ほそくついて居ゐました。父とうさんのお家うちの裏木戸うらきどから、竹藪たけやぶについて廻まはりますと、その細ほそい裏道うらみちへ出でました。祖母おばあさ

んに連れられて、父さんはよくその道をお墓の方へ通ひました。
 お墓へ行く道は、村のものだけが通る道です。旅人の知らない
 道です。田畠に出て働く人達の見える楽しい静かな道です。
 父さんのお家のお墓は永昌寺まで登る坂の途中を左の方へ曲つ
 て行つたところにありました。これが誰だ、あれが誰だ、と言つ
 て祖母さんの教へて呉れるお墓の中には、戒名の文字を赤く
 したのが有りました。その赤い戒名はまだこの世に生きて居
 る人で、旦那さんだけ亡くなつた曾祖母さんのやうな人のお墓で
 した。祖母さんは古い苔の生えたお墓のいくつも並んだ石壇の
 上を綺麗に掃いたり、水をまいたりして、

『御先祖さま、今日は。』

と言ふやうにお花を上げました。祖母さんがお墓の竹箒を立てかけて置くところは大きな杉の木の根キでしたが、その杉の木の間から馬籠の村が見えました。

お墓にある御先祖さまは永昌院殿と言ひました。永昌寺のお寺と同じ名でした。あの御先祖さまが馬籠の村も開けば、お寺も建てたといふことです。あれは父さんのお家の御先祖さまといふばかりでなく、村の御先祖さまでもあるといふことです。

なんと、あの御先祖さまのやうに、開かうと思へばこんな村も開けて行きますし、建てようと思へば永昌寺のやうなお寺が建て、それが父さんの代まで續いて来て居ます。先づ、思へ。何もかもそこから始まります。御先祖さまがさう思つてこんな山の中

へ村を開きはじめたといふことには、大きな力がありますね。

四四 蜂の子

地蜂といふ蜂は、よくよく土のほひが好きと見えて、地べたの中へ巣をかけます。土手の側のやうなところへ巣の入口の穴をつくつて置きます。

蜜蜂、赤蜂、土蜂、熊蜂、地蜂——木曾のやうな山の中にはいろ／＼な蜂が巣をかけますが、その中でも大きな巣をつくるのは熊蜂と地蜂です。熊蜂は古い土堀の屋根の下のやうなところに大きな巣をかけますが、地蜂の巣もそれに劣らないほど

の堅固けんこなもので、三階がいにも四階かいにもなつて居ゐて、それが漆うるしの柱しらで支さへてあります。こんなに地蜂ぢばちの巢すは大きいのですが、地蜂ぢばちの親おやといふものは小ちひさな蜂はちで、熊くま蜂ばちの半はん分ぶんもありません。あの小ちひさな建築けんちく技師ぎしが三階がいも四階かいもある巢すを建たて、一階かい毎ごとに澤たく山さんな部屋へやを造つくるので、そこには餘程よほどの協あはせた力ちからといふものが入はいつて居ゐるのでせう。

父とうさんの田舎あなの方ほうではあはちの蜂この子こを佃煮つくだにのやうにして大層たいそう賞し美びするきと聞きいたら、お前まへ達たちは驚おどろくでせうか。一ひと口くちに蜂はちの子こ美うするびと聞きいたら、お前まへ達たちは驚おどろくでせうか。一ひと口くちに蜂はちの子こと言いひましても、木曾きそで賞美しやうびするすのは地蜂ぢばちの巢すから取とつた子こけです。蜂はちの親おやは食たべません、どうかするとあすの巢なかの中なかからは親おやに成なりかけたのが出でて來きます。それを食たべません。お前まへ達たちはそ

こいらに居る蜂が庭なぞへ飛んで来て花の蕊を出たり入つたりするのを見かけるでせう。それからあの黄色い蓋のしてある蜂の巢の見事みごとに出来たのを見かけることも有るでせう。蜂は汚いものでは有りません。もしお前達まへたちが木曾きそでいふ『蜂の子』を食べ慣れて、あたゝかい御飯ごはんの上うへにのせて食べる時の味を覺えたら、

『父さん、こんなにおいしいものですか。』

と言ふやうに成るでせう。

ある日、友伯父ともをじさんは裏の木小屋うら きごやの近くにある古い池で蛙をつかまへました。土地とちのものが地蜂ぢばちの巢を見つけるには、先づ蛙の肉を餌えにします。それを友伯父ともをぢさんはよく知つて居ましたから、細い竿さをの先に蛙の肉を差し、飛んで来る蜂の眼めにつきさうな場處ばしよに

立て、別に餌にする小さな肉には紙の片をしばりつけて出して置きました。丁度釣をするものが魚を待つて居るやうに、友伯父さんは蜂の來るのを待つて居ました。蛙の肉を食べに來た蜂は餌をくはへて巢の方へ飛んで行きますが、その小さな蛙の肉にいた紙の片で巢の行衛を見定めるのです。斯うして友伯父さんは近所の子供達と一緒に、ある地蜂の巢を見つけたことが有りました。地蜂の巢を取りに行くものは、巢の出入口へ火薬を打ち込んで、澤山な親蜂が眼を廻して居る間に獲物を手に入れるのだと聞きました。そして巢を持つて逃げ歸るのだと聞きました。どうかすると蘇生つた蜂に追はれて刺されたといふ人の話も聞きました。さうなると鐵砲をかついで獸を打ちに行くも

おなじやうなものですよ。

四五 青い柿

『もうお前さんはそんなに赤くなつたのですか。』

とまだ青くて居る柿が、お隣りの柿に言ひました。この青い柿と、赤い柿とは、お百姓の家の庭にある二本の柿の木の枝に生つて居ました。

赤い柿は青い柿を慰めようと思ひまして、

『さう、力を落すものではありません。お前さんだつても今に、私のやうに好い色がつきますよ。』

と言ひましたら、青い柿は首を振りまして、

『いえ、あのお猿さんが蟹にぶつけたのも、きつと私のやうな澁柿で、自分で取つて食べたといふのはお前さんのやうな甘い柿ですよ。』

ちからおとと力を落したやうに言ひました。

お百姓は庭へ見廻りに來まして、赤い柿を大きな筧に入れて持つて行つてしまひました。その木の枝の高い上の方には、たつた一つだけ柿の赤いのが残つて居ました。残つた赤い柿が高いところからお隣りの柿を見ますと、まだ一つも色のついたのが有りませんでしたから、

『どうしてお前さんは、そんなに愚圖々々して居るんですか。』

と尋ねました。さう言はれると、青い柿はまた力を落したやうに、
 『澁い柿は何時までたつても澁いと言ひますよ。さういへば節
 分の日に、棒を持った人が来て、『さあ、生ると申すか、生ら
 ぬと申すか』と言つて、柿の木を打ちませう。その時、もう一人
 の人が柿の木に代つて、『生ります、生ります』と答へますね。
 あの棒で強く打たれ、ば打たれるほど、柿は甘くなるとかき聞き
 ました。どうも私は節分の日に、棒で打たれ方が足りなかつた
 と思ひます。』と答へました。

柿の好きなお百姓の子供は青い柿を見に來ましたが、取つて
 食べて見る度に澁さうな顔をして、食べかけのを捨て、しまひま
 した。それからお隣りの赤い柿の方へ行つて、たつた一つだけ高

いとところに残つて居たのを長い竿で落しました。もうお隣りの木の枝には一つも赤い柿がありません。それを見ると、青い柿は自分獨り取残されたやうに、よけいに力を落しました。

そのうちに、お百姓が復た庭へ見廻りに來ました。今度は青い柿の生つた木の下へ來まして、斯う聲を掛けました。

『御覽、甘い柿はもう一つもなくやつてしまひました。今度はお前さんの番に廻つて來ましたよ。どんな柿の澁いのも、霜が來れば甘くなります。皮をむいて軒下に釣るして置いても甘くなります。澁い柿はもつとそこに辛抱してお出なさい。そして時の力といふのをお待ちなさい。』

四六 小鳥の先達せんだつ

小鳥ことりの來くる頃ころになりますと、いろ／＼な種類しゆるゐの小鳥ことりが山やまを通とほりました。

つぐみつぐみ、ひひは、ああととり、子鳥こどり、深山鳥みやま、頬白ほくじろ、山雀やまがら、四十雀しじふから——とても
 數かずへつくすことが出來できません。ああの足あしの色いろが赤あかくて、羽はねに青あをい斑ふ
 の入はいつた斑鳩いかるも、他ほかの小鳥ことりの中なかにまじつて、好すきな榎木えのきの實みを食た
 べに來きました。

木曾きその山やまの中なかは小鳥ことりの通とほり路みちだと言いふことことでして、毎朝まいあさ々々、夜よ
 のあけがたには驚おどろくばかり澤たくさん山ことりな小鳥むれの群やまが山とほを通とほります。そ
 の中なかでも、群むれをなして多おほく通とほるのは鶇つぐみ、鶇ひはなどです。

この小鳥の群には、必ず一羽づゝ先達の鳥があります。その鳥が空の案内者です。澤山に随いて行く鳥の群は案内する鳥の行く方へ行きます。もしかして案内する鳥が方角を間違へて、鳥屋の網にでもかゝらうものなら、随いて行く鳥は何十羽ありましても皆同じやうにその網へ首を突込んでしまひます。

『さあ、皆さん、お支度は出来ましたか。』
 そんなことを案内する小鳥が言つて、澤山な鳥仲間の先に立つて出掛けるのだらうと思ひます。
 鳥にも先達はありますね。

四七 鳥屋

むら ひとたち
 村の人達に連れられて、
 やま うへ ほう
 山の上の方の鳥屋へ遊びに行つた時の
 はなし
 ことをお話しませう。

とや ことり
 鳥屋は小鳥を捕るために造つてある小屋のことです。何方を向い
 やま
 ても山ばかりのやうなところに、その小屋が建て、あります。屋
 ね うへ き は かく
 根の上は木の葉で隠して、空を通る小鳥の眼につかないやうにし
 そら とほ ことり
 てあります。その小屋の周圍に、細い丈夫な糸で編んだ鳥網
 こや まはり
 の大きなのが二つも三つも張つてあるのです。網を張つた高い竹
 おほ
 竿には鳥籠が掛つて居ました。その中には囀が飼つてありま
 けざを とりかご か
 して、小鳥の群が空を通る度に好い聲で呼びました。

『もしく、鶉さん。』

この囀をとりになる鳥の呼よび聲こゑは、春先はるさきから稽古けいこをした聲こゑですから、
 たかそら高い空ほうの方ほうまでよく徹とほりました。それを聞ききつけた小鳥ことりの先達せんだつ
 が好こゑい聲こゑに誘さそはれて降おりて來きますと、他ほかの小鳥ことりも同おなじやうに空そらか
 ら舞まひ降おりて來きます。

その時とき、降おりて來きた小鳥ことりをびつくりさせるものは、急きふに横よこ合あひか
 ら飛とび出す薄うす黒くろいものと、鷹たかの羽音はおとでもあるやうなプウうなくうな唸うなつ
 て來くる音おとです。

『これは堪たまらん。』

と小鳥ことりの先達せんだつは張はつてある網あみの中なかへ飛とび込こみます。他ほかの小鳥ことりも
 あはてまして、みんな網あみの中なかへ飛とび込こみます。鳥屋とやで捕とれる小鳥ことり
 はこんな風ふうにして網あみにかかりますが、小鳥ことりをびつくりさせたのは

ほかのものでも有りません。横合から飛出した薄黒いものは、鳥屋で人の振る竹竿の先についた古い手拭か何かの布でした。鷹の羽音でもあるやうに唸つて来た音は、その竹竿を手にした人が口端を尖らせてプウ〜何か吹く眞似をして見せた聲でした。

鳥屋で捕れる小鳥は、一朝に六十羽や七十羽ではきかないと言ひました。この小鳥の捕れる頃には、村の子供はそろ〜猿羽織を着ました。急に降つて来て、また急に止んでしまふやうな雨も、深い林を通りました。

四八

ろばた
爐邊

爺ぢいやが山やまから茸きのこを採とつて來きたり、栗くりを拾ひろつて來きたりする頃ころは、お
 家の爐邊ろばたの樂たのしい時ときでした。

爺ぢいやは爐ろで栗くりを燒やいて、友ともさんや父とうさんに分わけて呉くれるのを樂たのみ
 にして居ゐました。ある晚ばん、爺ぢいやが裏うらのお稻荷いなりさまの側わきから拾ひろつて
 來きた大おほきな栗くりを爐ろにくべまして、おいしさうな燒やきぐり栗くりのほひを
 させて居ゐますと、それを爐邊ろばたの板いたの上うへで羨うらやましさうに見みて居ゐた澁しぶ
 柿かきがありました。

『庄吉しやうきちぢい爺ぢいさん、栗くりの澁しぶが燒やけてそんなに香かうばしさうになるも
 のなら、一ひとつ私わたしも燒やいて見みて呉くれませんか。』
 とその澁しぶ柿かきが言いひました。

爺ぢいやは父とうさんの見みて居ゐる前まへで、爐ろ邊ばたにある太ふとい鐵てつの火ひ箸ばしを取とり出だしました。それしづかきで澁しづかき柿あなに穴あなをあけました。栗くりを焼やくと同おなじやうにその澁しづかき柿あなを爐ろにくべました。そのうちあつに、※あつい灰はひの中なかに埋うまつて居ゐた柿かきの穴あなからは、ふうく澁しづを吹ふき出だしまして、焼やけた柿かきがそこへ出で來き上ありました。

『さあ、私わたくしも食たべて見みて下ください。』

とその柿かきが父とうさんに御ご馳ち走さうして呉くれるのを貰もらひまして、黒くろく焼やけた柿かきの皮かはをむきましたら、軒のき下したに釣つるして乾ほした柿かきでもなく、霜しもに逢あつて甘あまくなつた柿かきでもなく、その爐ろ邊ばたでなければ食たべられないやうな、おしい變かはつた味あぢの柿かきでした。

四九 山の中へ来る冬

とうきやう 東京で『ネツキ』といふ子供の遊びのことを父さんの田舎で
 は『シヨクノ』と言ひます。山の中は山の中なりに子供の遊びに
 も流行はやりがありまして、一頃ひところ『シヨクノ』が村中むらぢゆうに流行はやりしまし
 た。どこの田圃側たんぼわきへ行つて見ても、どこの畠はたけの隅すみへ行つて見
 も、子供こどもといふ子供の集まつて居るところでは、その遊びあそびが始はじま
 つて居ゐました。
 枯かれ々とした裏庭うらにはに出て、父さん達たちは『シヨクノ』の遊びあそびに
 する細こまい木かきを探さがしたり、それを手てごろの長さながに切きつたり、地ちべた
 へよく打ちこめるやうに先さきの方ほうを尖とがらせたり、時ときにはもう幾いくた度

か勝負しやうぶをした揚句あげくに土つちのついて齒はのこぼれたやつを削り直なした
 りして遊びあそびました。父とうさん達たちがそんな子供こどもらしいことをして居ゐる
 間に、爺ぢいやはまた木曾風きそふうな背負しよ梯子ぼしごを肩かたにかけ、鉈なたを腰こしに差さしま
 して、木きの枝えだをおろすために林はやしの方ほうへと出掛でかけました。
 山やまの中なかへ來くる冬ふゆは、斯かうして冬ふゆごもりの支度したくにかゝる爺ぢいやのここ
 ろへも、『シヨクノ』の遊あそびに夢中むちうになつて居ゐる父とうさん達たちのここ
 ろへも一緒しよにやつて來きました。
 黒くろい枯かれ枝えだや黒くろい木きの見みえるお家うちの裏うらの桑くは 畠ばたけの側わきで、毎まい朝あさ
 爺ぢいやはそこいらから集あつめて來きた落葉おちばを焚たきました。朝あさの焚たきは、
 寒さむい冬ふゆの來くるのを樂たのしく思おもはせました。

五〇 木曾の焼米

木曾の焼米といふものは青いやわらかい稲の香氣がします。

『お師匠さまが好きだから。』

と言つて、お勇さんの家からも、つきたての焼米をよく祖父さんのところへ貰ひました。父さんのお家の祖父さんは好きな焼米をかみながら、本を讀んで居たやうな人かと思ひます。

お勇さんの家では毎年酒を造りましたから、裏の酒藏の前の大きな釜でお米を蒸しました。それを『うむし』と言つて、重箱につめては父さんのお家へも分けて呉れました。あの『うむし』も、父さんの子供の時分に好きなものでした。

五 一 屋根の石と水車

屋根の石は、村はづれにある水車小屋の板屋根の上の石でした。
この石は自分の載つて居る板屋根の上から、毎日々々水車の廻るのを眺めて居ました。

『お前さんは毎日動いて居ますね。』
と石が言ひましたら、

『さういふお前さんは又、毎日座つたきりですね。』
と水車が答へました。この水車は物を言ふにも、ぢつとして居ないで、廻りながら返事をして居ました。

風^{かぜ}や雪^{ゆき}で水車^{すゐしや}小屋^{こや}の埋^うまつてしまひさうな日^ひが來^きました。石^{いし}は毎^ま
 いにちすわ 日座^{にちざ}つて居^ゐるどころか、どうかすると風^{かぜ}に吹^ふき飛^とばされて、板^い
 屋根^{たやね}の上^{うへ}から轉^{ころ}がり落^おちさうに成^なりました。水車^{すゐしや}は毎^{まい}日動^{にちうご}い
 て居^ゐるどころか、吹^ふきつける雪^{ゆき}に埋^{うづ}められて、まるで車^{くるま}の廻^{まは}
 らなくなつてしまつたことも有^ありました。
 この恐^{おそ}ろしい目^めに逢^あつた後^{あと}で、屋根^{やね}の石^{いし}と水車^{すゐしや}とが復^また顔^{かほ}を合^{あは}
 せました。石^{いし}はもう水車^{すゐしや}に向^{むか}つて、
 『お前^{まへ}さんは毎^{まい}日動^{にちうご}いて居^ゐますね。』
 とは言^いはなくなりました。水車^{すゐしや}も、もう屋根^{やね}の石^{いし}に向^{むか}つて、
 『お前^{まへ}さんは毎^{まい}日座^{にちすわ}つたきりですね。』
 とは言^いはなくなりました。

五二 炬燵こたつ

いろ／＼な話はなしの出る山家やまがのあたゝかい炬燵こたつ。
 鳥とりがとまりに行くところゆは木きです。子供こどもが冷つめいからだを温あために行ゆ
 くところは、家うちのものゝ顔かほの見みられる炬燵こたつです。

五三 唄うたの好きすな石臼いしうす

石臼いしうすぐらゐ唄うたの好きすなものは有ありません。石臼いしうすぐらゐ、又また、
 居眠いねむりの好きすなものも有ありません。

冬の夜長に、粉挽き唄の一つも歌つてやつて御覽なさい。唄の好きな石臼は夢中になつて、いくら挽いても草臥れるといふことを知りません。ごろく／＼ごろく／＼石臼が言ふのは、あれは好い心持だからです。もつと、もつと、と唄を催促して居るのです。

そのかはり、すこし手でもゆるめてやつて御覽なさい。居眠りの好きな石臼は何時の間にか動かなくなつて居ます。そして何時までゞも居眠りをして居ます。

父さんのお家の石臼は青豆を挽くのが自慢でした。それを黄粉にして、家中のものに御馳走するのが自慢でした。山家育ちの石臼は爐邊で夜業をするのが好きで、轆や『あかぎれ』の

切れた手も厭はずに働くものゝ好いお友達でした。

五四 冬の贈り物

峠の上から村の小學校へ通ふ生徒がありました。近いところから通ふ他の生徒と違ひまして、子供の足で毎日峠の上から通ふのはなかく骨が折れました。でも、この生徒は家から學校まで歩いて行く路が好きで、降つても照つても通ひました。寒い、寒い日に、この生徒が遠路を通つて行きますと、途中で知らないお婆さんに逢ひました。

『生徒さん、今日は。』

とそのお婆さんが聲を掛けました。お婆さんは通り過ぎて行つてしまはないで、

『生徒さん、今日も學校ですか。この寒いのに、よくお通ひです。毎日々々さうして精出して下さると、このお婆さんも御褒美をあげますよ。』

と言ひました。

知らないお婆さんは見かけによらない優しい人として、學校通ひをする生徒がかじかんだ手をして居ましたら、それをお婆さんは自分の手で温めて呉れました。

『まあ、斯様なかじかんだ手をして、よく寒くありませんね。そのかはり、お前さんが遠路を通ふものですから、丈夫さうに

成なりましたよ。御覽ごらん、お前まへさんの頬ほぺたの色いろの好よくなつて來きたと。』

ときさう言いひました。

生徒せいとは知しらない人ひとから斯こん様なことを言いはれたものですから、そのお婆ばあさんをよく見みましたら、右みぎの手てには山やまからでも伐きつて來きたやうな細ほそい木きの杖つえをついて、左ひだりの手てには籠かごを提さげて居ゐりました。籠かごの中なかには、青あを々とした蔦ふきの蕾つぼみが一はい入はつて居ゐりました。そのお婆ばあさんは、まるでお伽とき話ばなしの中なかにでも出でて來きさうなお婆ばあさんでした。

『お前まへさんは誰だれですか。』

と生徒せいとが尋たづねましたら、お婆ばあさんはニツコリしながら、提さげて居ゐ

る籠かごの中なかの露ふきの蕾つぼみを見せまして

『わたしは「冬ふゆ」といふものですよ。』

と生徒せいとに言いつて聞きかせました。夫それから、こんな事ことも言いひました。

『お家うちへ歸かへつたら、父とうさんや母かあさんに見みてお貰もらひなさい。お前まへさんの頬ほっぺたの紅あかい色いろもこのお婆ばあさんのこゝろざしですよ。』

五五 少年せうねんの遊いう学がく

父とうさんは九とつの歳としまで、祖おぢい父いさんや祖おばあ母あさんの膝ひざもと下もとに居ゐました
 がその歳としの秋あきに祖おぢい父いさんのいゝつけで、東とう京きやうへ學がく問もんの修しうげ
 業ふに出でることことに成なりました。父とうさんは友とも伯をぢ父いさんと一しよ緒ごにお家うち

の伯父をぢさんに連つれられて行くことに成なりました。

『二人ふたりとも東とうきやう京きやうへ修しうげふ業ぎふに行くんだよ。』

と伯父をぢさんに言いはれて、父とうさんは子供こども心こころにも東とうきやう京きやうのやうなど

ころへ行ゆかれることを樂たのしみに思おもひました。父とうさんより三としうへつ年ねん長の

友とも伯父をぢさんが、その時ときやうやく十二さい歳さいでした。

今いまから思おもへば祖母おばあさんもよくそんな幼ちひさ少せうな兄きやう弟だいの子こ供どもを東とうき

京やうへ出だす氣きになつたものです。その時ときの父とうさんは今いまの末すゑ子こよ

り年としが二ふたつも下したでしたからね。

この東とうき京やう行ゆきは、父とうさんが生うまれて初はじめての旅たびでした。父とうさんが

荷物にもつの用よう意いといへば、小ちひさな翫おもちや具ぐの鞆かばんでした。それは美み濃のの中な

津かつ川がはといふ町まちの方ほうから翫おもちや具ぐの商あきんど人どが來きた時ときに、祖おばあ母あさんが

買つて呉れたものでした。

『お前が東京へ行く時には、この鞆へ金米糖を一ぱいつめてあげますよ。』

と祖母さんは言ひました。父さんもその小さな鞆に金米糖を入れてもらつて、それを持つて東京に出ることを楽しみにしたやうなそんな幼少な時分でした。

五六 祖父さんと祖母さんのおせんべつ

祖母さんは、おせんべつのおしるしにとつて、東京へ出る父さんのために羽織や帯を織つて呉れました。

『トン／＼ハタリ、トンハタリ。』
 と祖母おばあさんは例れいの玄關げんくわんの側わきにある機はたに腰掛こしかけまして、羽織はおりにする黄八丈きぢやうの反物たんものと、子供こどもらしい帶地おびぢとを根氣こんきに織おつて呉くれました。

『トン／＼ハタリ、トンハタリ。』

その祖母おばあさんのおせんべつが織おれる時分じぶんには、父とうさんが生うまれて初はじめての旅たびに出でる時ときも近ちかくなつて來きました。

祖父おぢいさんは、父とうさんに書かいた物ものを呉くれました。好すきな焼米やきごめでも食たべながら田舎あなかで本ほんを讀よまうといふ祖父おぢいさんのことですから、父とうさんが東とうきやう京きやうへ行いつてから時とき々／＼出だして見みるやうにと言いひまして、少年せうねんのためになるやうな教訓をしへを七枚まいばかりの短冊たんざくに書か

いて呉くれました。それを紙かみに包つみまして、紙かみの上うへにも父とうさんを送おくる言葉ことばを書かいて呉くれました。

『これは大だい事じにして置おくがいゝ。東とう京きやうへ行いつたら、お前まへの本ほん箱んぼこのひきだしにでも入いれて置おくがいゝ。』
 と言いつて呉くれました。それが祖おぢい父いさんのおせんべつでした。

五七 伯父をぢさんの床屋とこや

東とう京きやうをさして學がく問もんに行ゆかうといふ頃ころの友とも伯父をぢさんも、父とうさんも、まだ二ふた人たりとも馬籠まごめ風ふうに髪かみを長ながくして居ゐました。友とも伯父をぢさんもはもう十二歳さいでしたから、そんな山やまの中なかの子供こどものやうな髪かみをし

て行つて東京で笑はれては成らないと、お家の人達が言ひ
ました。

そこで友伯父さんだけは頭を五分刈にして行くことに成りました。
ところが、村には床屋といふものが有りません。仕方なしに、伯
父さんが裏の桐の木の下へ友伯父さん連れて行きまして、伯父
さんが自分で床屋をつとめました。

面白い床屋がそこへ出来ました。腰掛はお家の踏臺で間に
合ひ、胸に掛ける布は大きな風呂敷で間に合ひました。床屋をつ
とめる伯父さんの鉢は、祖母さん達が針仕事をする時に平常使
ふ鉢でした。

この伯父さんは若い時分から神坂村の村長をつとめたくら

るの人ひとでしたが、なにしろ床屋とこやの方は素人しろうとでしたから、友伯父ともをぢさんの髪かみをチヨキくとやるうちに、長いところながと短いところみじかが出来できて、すつかり奇麗きれいに刈かりあげるのはなかく、大變たいへんな仕事しごとでした。

にはとよおどろ
 鶏けいは驚おどろいて、桐きりの木きの下したに頭あたまをさげて居ゐる友伯父ともをぢさんの方ほうへ飛とんで來きました。そして、髪かみを刈かつて貫もらつて居ゐる友伯父ともをぢさんの側わきで鳴なきました。長いことながお馴染なじみの友伯父ともをぢさんが東とうきやう京きやうへ行いつてしまふので、お家うちの鶏けいもお別わかれを惜をしんで居ゐたのでせう。

五八 お別わかれ

やまが 山家では何かある度にお客さまをして、互に呼んだり呼ばれたり
 します。いよく父さん達が 東京行の日もきまりましたので、
 お隣りのお勇さんの家では父さん達をお客さまにして呼んで呉れ
 ました。その晩は伯父さんも友伯父さんも呼ばれて行きましたが、
 『押飯』と言つて鳥の肉のお露で味をつけた御飯の御馳走があ
 りましたつけ。

とう 父さんはお雛の家へも遊びに行つて見ました。幼少い時分から父
 さんを抱いたり負つたりして呉れたあのお雛の家へも、もう遊び
 に行かれないかと思ひまして、お別れを告げるつもりもなく遊び
 に行く氣になつたのです。お雛の父親の名は數衛と言つて村で
 もきたないので 評判な髪結ですとは、前にもお話して置い

たと思ひます。日頃父さんはそのきたない髪結の子に育てられ
 たと言つて村の人達にからかはれて居ましたから、數衛の家へ
 遊びに行くところを誰かに見つけられたら、復た人にかかはれ
 ると思ひました。そこで父さんはお墓参りに行く道の方から、
 成るべく知つた人に逢はない田圃の側を通りまして、こつそりと
 出掛けて行きました。
 數衛の家は村の中でもずっと坂の下の方にありました。父さんの
 せうがくかうともだち、あふぎや、きんたらう
 小學校友達に扇屋の金太郎さんといふ子供がありました
 が、その金太郎さんの家よりもまだずっと下の方でした。父さ
 んが遊びに行きましたら、數衛は大層よろこびまして、爐にか
 けたお鍋で菜飯をたいて呉れました。それからお茄子の味噌汁

をもこしらへまして、お別れに御馳走して呉れました。藁で編んだ菫の敷いてある爐邊で、數衛のこしらへて呉れた味噌汁はお茄子の皮もむかずに入れてありました。たゞそれが輪切りにしてありました。しかし父さんは後にも前にも、あんなおいしい味噌汁を食べたと思つたことは有りません。

五九 さやうなら

お家を出る日が來ました。

その前の日に、曾祖母さんは友伯父さんと父さんを側へ呼びましてお家の爐邊でいろ／＼なことを言つて聞かせて呉れました。父

さんはこの年とつた曾祖母さんがお膳にむかひながら、お別れの
 涙を流したことをよく覚えて居ます。でも曾祖母さんはしつかり
 とした氣象の人で、父さん達がお家を出る日には、もう涙を見
 せませんでした。

伯父さんに附いて 東京へ行く父さんの道連には、吉さんとい
 ふ少年もありました。吉さんはお隣りの大黒屋の子息さんで、
 鐵さんやお勇さんの兄さんに當る人でした。この人は父さん達と
 違ひまして、眼の療治に 東京まで出掛けるといふことでした。
 なにしる父さんはまだ九歳の少年でしたから、草鞋をはくとい
 ふ事も出来ません。そこで爺やが小さな麻裏草履を見つけて來
 まして、踵の方に紐をつけて呉れました。

とう
父さんはその新あたしい草履ざうりをはいた足あしで、お家の臺うち所だいどころの外そとに遊あそんで居ゐる鷄にはとりを見みに行ゆきました。大おほきな玉たまご子をよく父とうさんに御馳走ごちさうして呉くれた鷄にはとりは、

『コツ、コツ、コツ、コツ。』

とお名残なごりを惜をしむやうに鳴なきました。

その邊へんにはお馴染なじみの桐きりの木きも立たつて居ゐました。その桐きりの木きは背せいこそ高たかくても、まだ木きの子供こどもでして、

『いよく東とうきやう京きやうの方ほうへ行ゆくんですか。私わたしも大おほきくなつてお前まへさんさんを待まつて居ゐます。御覽ごらん、あそこにはお前まへさんさんに桑くはの實みを御馳ごち走そうした桑くはの木きも居ゐます。お前まへさんさんのよよく登のぼつた柿かきの木きも居ゐます。

ああの土藏どさうの横手よこての石垣いしがきの間あひだには、土藏どさうの番ばんをすとる年としとつた蛇へびが

居ゐて、今いまでも居ゐ眠ねむりをして居ゐます。私わたし達たちはみんなお前まへさんの

お友とも達たちです。私わたし達たちをよく覺おぼえて居ゐて下くださいよ。』

と言いひました。

父とうさんはその草履ざうりで、表おもて庭にはの門もんの内うちにある梨なしの木きの側わきへも行い

きました。

『まあ、好いい草履ざうりを買かつて貰もらひましたね。その草履ざうりには紐ひもが結むすんでありませぬ。お前まへさんが大おほきくなつて歸かへつて來きたら、私わたしもまた大おほきな梨なしをどつさり御馳走ごちさうしますよ。』

とその梨なしの木きが言いひました。

伯父おぢさんは父とうさん達たちを引連ひきつれまして、日頃ひごろ親したしくする近所きんじよの家う々ち々ちへ挨拶あいさつに寄よりました。大黒屋だいこくやへ寄よれば小母をばさん達たちが家うちの

外^{そと}まで出^でて見^み送^{おく}り、俵^{たはら}屋^やへ寄^よればお婆^{ばあ}さんが出^でて見^み送^{おく}つて呉^くれました。八^や幡^{はた}屋^や、和^{いづ}泉^{みや}屋^や、丸^{まる}龜^{かめ}屋^や、まだその他^{ほか}にも伯^{おぢ}父^{ちやん}さんの
 挨^{あい}拶^{さつ}に寄^よつた家^{うち}は澤^{たく}山^{さん}ありましたが、その度^{たび}に父^{ちやん}さん達^{たち}は坂^{さか}
 になつた村^{むら}の道^{みち}を峠^{たうげ}の上^{うへ}の方^{ほう}へ登^{のぼ}つて行^いきました。
 馬^ま籠^{ごめ}の村^{むら}はづれまで出^でますと、その峠^{たうげ}の上^{うへ}の高^{たか}いところにも耕^{たが}し
 た畠^{はたけ}がありました。そこにも伯^{おぢ}父^{ちやん}さんに聲^{こゑ}を掛^かけるお百^{ひやく}姓^{しやう}が
 ありました。父^{ちやん}さんが遊^{あそ}び廻^{まは}つた谷^{たに}間^まと、谷^{たに}間^まの向^{むか}ふの林^{はやし}も、そ
 の邊^{へん}からよく見^みえました。山^{やま}と山^{やま}の重^{かさ}なり合^あつた向^{むか}ふの方^{ほう}には、
 祖^{おぢい}父^{ちやん}さんの好^すきな惠^ゑ那^な山^{さん}が一^{ばん}高^{たか}い所^{ところ}に見^みえました。祖^{おぢい}父^{ちやん}さんも、
 祖^{おばあ}母^{ちやん}さんも、さやうなら。馬^ま籠^{ごめ}も、さやうなら。惠^ゑ那^な山^{さん}も、さや
 うなら。

六〇 峠の馬の挨拶

馬籠まごめの村むらはづれには、杉すぎの木きの生はえた澤さはを境さかひにしまして、別べつに峠たうげといふ名前なまへのちい小さな村むらがあります。この峠たうげに、馬籠まごめに、湯舟澤ゆぶねぎはと、それだけの三ヶ村さんそんを一いつ緒しよにして神坂村みさかむらと言いひました。

『名物めいぶつ、栗くりこはめし——御休處おやすみどころ。』

こんな看板かんばんを掛かけた家うちが一軒けんしかない程ほど、峠たうげは小さな村むらでした。そこに住すむ人ひと達たちはいづれも山やまの上うへを耕がやすお百ひやく姓やくしやうばかりでした。その村むらにも伯父おぢさんが寄よつて挨拶あいさつして行く家うちがありました。が、入口いりぐちの柱はしらのところに繋つながれて居あいた馬うまは父とうさん達たちの方ほうを見みま

して、

『お揃そろひで、東とうきやう京かうの方ほうへお出掛でかけですか。』
 と聲こゑを掛かけました。この馬うまは背中せなかに荷物にもつをつけて父とうさんのお家うちへ
 來きたこともある馬うまでした。
 やがて父とうさんは伯父おぢさんの後あとに附ついて、めづらしい初旅はつたびに上のぼり
 ました。父とうさんが歩あるいて行ゆく道みちを木曾路きそぢとも、木曾街道きそかいだうともいふ
 道みちでした。

六一 初旅はつたび

『もしく、お前まへさんの草履ざうりの紐ひもが解とけて居ゐますよ。』

と路みちばたに咲さいて居ゐた龍りんだう膽だうの花はなが父とうさんに聲こゑを掛かけて呉くれました。龍りんだう膽だうは桔きき梗やうに似にた小ちいさな草くさ花ばなで、よく山やま道みちなぞに咲さいて居ゐるのを見みかけるものです。

父とうさんがその小ちいさな紫むらさきいろの花はなの前まへで自じ分ぶんの草ざうり履りの紐ひもを結むすぼうと
 して居をりますと、伯お父ちさんは父とうさんの側そばへ來きて、腰こしを曲こめて手て傳つだ
 つて呉くれました。慣なれない旅たびですから、おまけに馬ま籠ごめから隣となり
 村らの妻つま籠ごへ行ゆく二に里りの間あひだいしは石いしころの多おほい山やま道みちですから、父とうさ
 んの草ざうり履りの紐ひもはよく解とけました。その度たびに伯お父ちさんが足あしをとめて
 は紐ひもを結むすんで呉くれました。

隣となりむら村つまごの妻籠つまごには、お前まへ達たちの祖母おばあさんの生うままれたお家うちがありま
 した。妻籠つまごの祖父おぢいさんといふ人もまだ達たつしや者じぶんな時とき分ぶんで、父とうさん達たち
 をよろこんで迎むかへて呉くれました。そこで、初はじめの日は妻籠つまごに泊とまりま
 して翌よくあさ朝あさまた伯父おぢさんに連つれられて出で掛かけました。
 妻籠つまごの吾妻橋あづまばしといふ橋はしの手前てまへまで行いきますと、鵲せきれいが飛とんで
 居ゐました。その鵲せきれいはあつちの大きな岩いはの上うへへ飛とんだり、こつ
 ちの大きな岩いはの上うへへ飛とんだりして、
 『どうです。妻籠つまごには大きな川かはがあるでせう。』
 と言いつて見みせました。
 父とうさんも、そんな大きな川かはをみるのは初はじめてでした。青あをい、どろ

んとした水は渦を巻いて、大きな岩の間を流れて居ました。

『これが木曾川ですか。』

と父さんが尋ねましたら、鶺鴒は尻尾を振つて、

『いえ、これは蘭の山奥の方から流れて来る川です。木曾川へ入る川です。』

と教へて呉れました。

吾妻橋の手前で見た川が大きいと思ひましたら、木曾川はそれよりも大きな川でした。

六三 おんやすみどころ
御休處

何なんといふ深ふかい山やまや谷たにが父とうさんの行ゆく先さきにありましたらう。父とうさん
 は木き曾そ川がの見みえる谷たに間あひについて、林はやしの中なかを歩あるいて行ゆくやうなも
 のでした。どうかすると晝間ひるまでも暗くらいやうな檜木ひのきや杉すぎのしんく
 と生はえて居ゐるところを通とほることもありました。あゝこれが三留野みとめの
 といふところか、これが須原すはらといふところか、と思おもひまして、初はじ
 めて見みる村むら々くが父とうさんにはめづらしく思おもはれました。何なにもかも
 父とうさんには初はじめてゞした。高たかい山やまの上うへの方ほうから村むらはづれの街道かいだう
 のところまで押おし寄よせて來きて居ゐる黒くろい岩いはだの石いしだのを見みるのも初はじ
 めてゞした。

父とうさんが東とうきやう京やうへ出でる時分じぶんには、鐵道てつだうのない頃ころですから、是ぜ
 非ひとも木き曾そ路ぢを歩あるかなければ成なりませんでした。もう好いい加減かげん歩ある

い^いて行^いつて、谷^{たに}がお仕舞^{しまひ}になつたかと思^{おも}ふ時分^{じぶん}には、また向^{むか}ふの
 方^{はう}の谷間^{たにま}の板屋根^{いたやね}から煙^{けむり}の立^たち登^{のぼ}るのが見^みえました。さういふ煙^{けむり}
 の見^みえるところにかぎつて、旅^{たびびと}人の腰掛^{こしか}けて休^{やす}んで行^ゆく休^{やす}茶^{みぢ}
 屋^やがありま^した。

おんやすみどころ
 『御休處』

と^して、白^{しろ}いとこ^ろろに黒^{くろ}い太^{ふと}い字^じで書^かいてある看^{かん}板^{ばん}は、父^{とう}さん
 達^{たち}にも寄^よつて休^{やす}んで行^ゆけと言^いふやうに見^みえました。さういふ休^{やす}み
 茶^ぢ屋^やには、きまりで『御嶽講』の文^も字^じを染^そめぬいた布^{きれ}がいく
 つも軒^{のき}下^{した}に釣^つるしてありま^した。

たの^{たの} おんやすみどころ
 樂^{たの}しい御休處。父^おさん^{ばあ}が祖^お母^ぼさん^あから貰^{もら}つて來^きた金^{こん}米^{べい}糖^{いたう}なぞを
 小^{ちひ}さな靴^{かばん}から取^{とり}出すのも、その御休處^{おんやすみどころ}で^した。場^ば處^{しょ}によりま^して

は、冷つめたい清しみづ水づが樋とひをつたつて休やす茶みぢ屋やのすぐ側わきへ流ながれて來きて居ゐます。さういふ清しみづ水づはいくらでも父とうさんさんに飲のませて呉くれました。

六四 寢ね覺ぞめの蕎そば麥や屋

寢ね覺ぞめといふところには名な高たかい蕎そば麥や屋やがありました。

木き曾そ路ぢを通とほるもので、その蕎そば麥や屋やを知らしないものはないと、伯を父ぢさんさんが父とうさんさん達たちに話はなして呉くれました。そこは蕎そば麥や屋やとも思おもへないやうな家うちでした。多おほ勢ぜいの旅たび人びとが腰こしか掛かけて、めづらしさうにお蕎そば麥やのおかかはりりをして居ゐました。伯を父ぢさんさんは父とうさんさん達たちにも山やまのやうに盛もりああげたお蕎そば麥やを奢をこりまして、草くたぶ臥ぶれて行ゆつた足あしを休やすませ

て呉れました。

六五 浦島太郎の釣竿

寢覚ねざめには、浦島うらしまたらう太郎の釣竿つりざをといふものが有ありました。それも
 伯父おぢさんの話はなして呉くれたことですが、浦島うらしまたらう太郎の釣つりをしたとい
 ふ岩いはもありました。それから、あの浦島うらしまたらう太郎が龍宮りうぐうから歸かへつ
 て來きまして自分じぶんの姿すがたをうつつして見みたといふ池いけもありました。
 木曾きその人は昔むかしからお伽話とぎばなしが好すきだつたと見みえますね。岩いはにも、
 池いけにも、釣竿つりざをにも、こんなお伽話とぎばなしが殘のこつて、それを昔むかしから
 言いひ傳つたへて居あります。

六六 棧橋の猿

『もしく、お前さんの背中に負つて居るのは何ですか。』
 木曾の棧橋といふところの休茶屋に飼つてあるお猿さんが、
 そんなことを父さんに尋ね《たづ》ねました。

父さんは小さな鞆を風呂敷包にしまして、それを自分の背中に
 負つて居ましたから、

『お猿さん、これは祖母さんがおせんべつに呉れてよこしたので
 す。途中で退屈した時におあがりと言つて、祖母さんが呉れて
 よこした金米糖です。わたしはこれから東京へ修業に行

くところですが、この棧橋まで来るうちに、金米糖も大分すくなくまりました。』

とお猿さんに話して聞かせました。

このお猿さんの飼つてあるところは高い崖の下でした。橋の下を流れる木曾川がよく見えて、深い山の中らしい、景色のいいところでした。街道を通る旅人は誰でもその休茶屋で休んで行く^ゆくと見えて、お猿さんもよく人に慣れて居ました。

父さんが東京へ行く話をしましたら、お猿さんも羨ましうらやみに、

『わたしも一つ金米糖でも頂いて、皆さんのお供をしたいものです。御覽の通り、わたしはこの棧橋の番人^{ばんにん}です、皆さん

のお供ともをしたいにも、こゝを置いては行かれませゆん。まあ、この
 山やまの中なかの土産話みやげばなしに、そこにある古ふるい石いしでもよく見みて行いつて下くださ
 い。これから東とうきやう京きやうへお出いでになりまいしたら、その石いしに發句ほつくが一い
 つ彫ほつてあつたとお話はなし下ください。その發句ほつくをつくつたのは昔むかしの芭ば
 蕉翁せをうといふ人ひとだとお話はなし下ください。』
 と言いひまいした。

伯父おぢさんも、吉きちさんも、友伯父ともをぢさんも、みんなお猿さるさんの側わきへ來き
 まして、崖がけの下したにある古ふるい石碑せきひの文字もじを讀よみました。それには、
 『かけはしやいのちをからむ蔦つたかづら』
 としてありました

六七 山越しやまご

やがて、父とうさんは伯父おぢさんに連つれられて、『みさやま峠たうげ』といふ山やまを越こしにかゝりました。

父とうさんも馬籠まごめのやうな村むらに育そだつた子供こどもです。山道やまみちを歩あるくのに慣な

れては居ゐます。それにしても、『みさやま峠たうげ』は見み上げるやうな

険けはしい山坂やまさかでした。大人おとなの足あしでもなく、骨ほねが折をれるといふく

らゐのところでした。何故なぜ、伯父おぢさんがそんな山越やまごしにかゝつた

かといふに、早はやく皆みんなを連ばしれて馬車ばしやのあるところまで出でたいと考かんがへ

たからです。木曾きそは山やまに圍かこまれた深ふかい谷間たにあひのやうなところす

から、どうしても峠たうげ一つだけは越こさなければ成ならなかつたのです。

何なんと言いつても父とうさんはまだ幼ちひさ少さかつたものですから、友伯父ともをぢさんや吉きちさんのやうには歩あるけませんでした。

『さあ、金米糖こんべいたうを出だすから、もつと早はやくお歩あるき。』

と伯父をぢさんに言いはれましても、父とうさんの足あしはなかく前まへへ進すすまなくなりました。

伯父をぢさんの金米糖こんべいたうに勵はげまされて、復またた父とうさんも石いしころの多おほい山や坂まさかを登のぼつて行いきました。そのうち日ひが暮くれかゝりさうに成なつて來きました。伯父をぢさんはもう困こまつてしまつて、父とうさんの締しめて居ゐる帶おびに手拭てぬぐひを結ゆはひつけ、その手拭てぬぐひで父とうさんを引ひいて行いくやうにして呉くれました。

六八 沓掛の温泉宿

今いまだに父とうさんはあの『みさやま峠たうげ』の山越やまごしを忘わすれません。草臥くたぶれた足あしをひきずつて行いきました、日暮方ひくれがたの山やまの裾すその方ほうにチラ／＼あかり燈火あかりのつくのを望のぞんだ時ときの嬉うれしかつた心こゝろもち持もちをも忘わすれません。

その燈火あかりのついて居ゐるところが、沓掛くっかけの温泉宿をんせんやどでした。

六九 乗合馬車

沓掛くっかけまで行いきましたら、やうやくその邊へんから中仙道なかせんだうを通かよふ乗の

りあひばしや
合馬車がありました。

それから父さんは伯父さんや吉さんや友伯父さんと一緒に東

京行の馬車に乗りまして、長い長い中仙道の街道を晝も

夜も乗りつゞけに乗つて行きました。やがて馬車がある町を通り

ました時に、父さんは初めて消防夫の梯子登りといふものを見

ました。高い梯子に乗った人が町の空で手足を動かして居ました。

父さんは馬車の上からそれを眺めて、子供心にめづらしく思つて

行きました。伯父さんの話で、そこが上州の松井田といふ町

だといふことも知りました。またそれから飽きるほど乗つて行く

うちに、馬車はある川の岸へ出ました。川にかけた橋の落ちた時

とかで、伯父さんでも誰でも皆その馬車から降りて、水の浅い所

を涉わたりました。

父とうさんは馬べつ丁たうの背せ中なかに負おさつて、川かはを越こしました。その川かはは烏か

川かはといふ川かはだと聞ききました。

まあ、父とうさんも、どんなに幼ちひ少さい子こ供どもだつたでせう。東京とうきやう行ゆき

の馬ば車しやの中なかには、一いつ緒しよに乘のり合あせた他よ所その小を母ぼさんもありまし

た。その知しらない小を母ぼさんが旅たびの袋ふくろからお菓くわ子しなぞを出だしまして、

それを父とうさんにおあがりと言いつて呉くれたこともありました。いく

ら乗のつても乗のつても、なか／＼東とう京きやうへは着つかないのですか

ら、しまひには父とうさんも馬ば車しやに退たい屈くつしまして、他よ所その小を母ぼさん

に抱だかれながらその膝ひざの上うへに眠ねむつてしまつたことも有ありました。

七〇 終の話 をはりはなし

こんな風ふうにして父とうさんは自分じぶんの生うれたふるさとを幼少ちひさな時じぶん分ぶんに出でて来たきたものです。それから長い年なが月としつきの間あひだを置いては、木曾きそへ歸かへつて見みますと、その度たびにあの山やまの中なかも變かはつて居ゐました。しかし父とうさんの子供こどもの時じぶん分ぶんに飲のんだふるさとのお乳ちくの味あじは父とうさんの中なかに變かはらずにありませよ。

太郎たらうよ、次郎じらうよ、お前まへ達たちも大おほきくなつたら父とうさんの田舎あなを訪たづねて見みて下ください。

ふるさとの後にのち

この本ほんは前まへに出だした『幼をさなきもの』と姉妹しまいのやうにして出だします。あの佛蘭西ふらんす土産すみやげには、父とうさんのお話はなしばかりでなく、佛蘭西ふらんすの方ほうで聞きいて來きたいろく々はなしのお話はなしも入いれて置おきましたが、この『ふるさと』には父とうさんのお話はなしばかりを集あつめました。この本ほんが出で來きましたら、木曾きその伯父おぢさんの家うちに勉べん強きやうして居ゐる三郎ちやうのところへも一冊さつ送おくりたいと思おもひます。

父とうさんはこの少せう年ねんの讀とく本ほんを書かかうと思おもひ立たつた頃ころに、別べつにつくつて置おいたお話はなしが一つあります。それは『兄きやう弟だい』のお話はなしで

す。それをこの本の後に添へようと思ひます。

こゝにそのお話があります。

早く眼がさめても何時までも寢て居るのがいゝか、遅く眼がさめてもむつくり起きるのがいゝか、そのことで兄弟が争つて居ました。

そこへこの兄弟の祖父さんが來まして、

『まあ、お前達は何をそんなに争つて居るのです。』
と尋ねました。

兄が言ふには、

『祖父さん、私は早く眼がさめました。そのかはり何時までも寢て居ました。弟は遅く眼がさめました。そのかはり私より先に起

きました。私わたし達は今いまそのことと言いひ合あつて居ゐるところです。』

『私わたしは遅おそく眼めがさめても、兄にいさんのやうに長ながく寝ねて居ゐないで、むつくり起おきた方ほうがいゝと思おもひます。』

おとうと
と弟いが言いひました。すると、兄あにが言いふには、

おとうと
『弟いがあんなことと言いつて威ゐ張ばつて居ゐます。そのくせ、私わたしが早はやく

眼めのさめた時じ分ぶんには、弟おとうとはまだなんにも知しらないでグウ／＼グ

ウ／＼と眠ねつて居ゐました。私わたしは鶏にはとりの鳴ないたのを知しつて居ゐます。

夜よの明あけたのも知しつて居ゐます。』

『そんなことと言いつて兄にいさんが威ゐ張ばつても、何い時つまでも兄にいさんの

やうに寝ねて居ゐたら、眼めがさめないのも同おなじことです。』

とまた弟おとうとが言いひました。

祖父おぢいさんはこの兄きやうだい弟あいらその争あらそひを聞きいて笑わらひ出だしました。さうして斯かう言いひました。

『馬鹿ばかな兄きやうだい弟だいだ。お前まへ達たちがそんなことを言いつて争あらそつて居ゐるうちに、太おてんとう陽やうさまはもう出でてしまつたぢやないか。』

(終)

青空文庫情報

底本：「名著複刻 日本児童文学館 二」ほるぷ出版

1973（昭和48）年3月初版発行

底本の親本：「ふるさと」實業之日本社

1920（大正9）年12月5日発行

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

※疑問点の確認にあたっては、「島崎藤村全集 第十六卷」新潮社、1951（昭和26）年3月15日発行を参照しました。

入力：Nana ohbe

校正：林 幸雄

2004年1月21日作成

2004年2月19日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

ふるさと

島崎藤村

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>